

王子の秘密と俺の秘密～女嫌いの俺が、学園の王子が実は女だと
知ってしまった話～

男装ヒロインスキー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ちよつとした理由で女が嫌いな主人公はある日、学園の王子と名高いイケメン、園崎輝（そのざきあきら）が実は女だと言う事を知ってしまうそんな話。コメディーです。

カクコム様でも投稿しています。後、Twitterで更新通知用アカウント作りしましたhttps://twitter.com/sakanano_sakanana?s=09

12月初めまで更新止まるかもです。

目次

1 話	1
2 話	4
3 話	8
4 話	14
5 話	22
6 話	28
7 話	32
オペレーションW	38
8 話	42
9 話	48
10 話	54
11 話	61
12 話	68
12・5話と13話	77
14 話	84
15 話	89
16 話	96
17 話	103
18 話	113
井原友樹のキングオブエジプト	120
19 話	124

1話

「だからあ、俺はお前のナンパになんぞに付き合わん」

「いや頼む!! 一生のお願いだから! な!?!」

「うるせえくたばれ」

昼休みの時間。唾が飛んできそうな程に顔を近づけてきて懇願する友人、井原友樹の頭を叩き、俺はため息吐く。

「お前さあ、俺がその手の誘い受けないの知ってんだろ」

「わあってるよ! だがしかし!! お前、髪で顔は見えにくいけど、よく見ると女受け良い顔してんだし、お前を連れてナンパにさえ行きや女の一人や二人……ぐへへ」

「二昨日来やがれアホ」

まだ何かを喋ろうとする井原を無視し、俺は目線を前の席に向ける。

「俺じゃなくてアイツ誘えよ、ほら、あそこの『王子』」

俺が指さした先。

そこには女子生徒に囲まれた、王子と言っても過言ではない男が穏やかな笑みを浮かべている。

まるで童話の世界からそのまま出てきたかのような煌びやかな金髪に。サファイアを彷彿とさせる美しい双眸。

正におとぎの国からやってきた白馬の王子様。なんて言葉が似合う程に整った顔立ちをしている男。

奴の名は園崎（そのぎき）輝（あきら）。この学園において、『王子』なんて二つ名が付けられた男だ。

ちなみに井原は『バカの擬人化』なんて二つ名が付けられ、わりと学園では有名人である。

更に言うと俺は『バカのお供』とか言われている。非常に不本意である。

「あいつほど女受けがいい顔の持ち主はいねえだろ。ほら、とつとと誘ってこい」

「あんな女に困ってないですよーみてえな野郎連れてナンパになんか

行けっか!! そもそも王子をナンパなんか誘ってみろ! 女が皆王子に魅了されるわ!!」

そう言っって苦虫を10匹程噛み潰したような表情を浮かべる井原をどう処理するか考えていると、不意に、王子が俺達の方を向き、俺と目が合う。

すると王子は立ち上がり、何故か俺達の方に向かってくると口を開く。

「やあ、君達。僕に何か用かな? 王子、って聞こえたけど」

と、話しかけてくる王子を前にして、俺と井原は思わず目を合わせる。

同じクラスではあるが、王子と話した事は一度もないしそもそも俺は用事なんかない。

俺は机の下から『お前が話せ』という念を込めて井原をつつく。

「い、いやあ……用ってわけじゃねえよ。ナンパだよナンパ、ナンパの話」

「ナンパ?」

「ああ、こいつをナンパに誘ったら嫌の一点張りで、俺じゃなくて王子を誘えばいいだろ。なんて言い出してよ」

「なるほど、そう言う事かい……残念だけど、ナンパには興味ないね。悪いけど他を当たってくれないかい? 井原君」

「いや、冗談だから誘う気なんかねえ……ってか、俺の名前覚えてんのか?」

「ふふ、大事なクラスメイトの事を忘れる程、僕は薄情じゃないよ」

「……こういう細かい所がモテの秘訣か」

感心しながらメモをとる井原にアホを見る目を向けていると、王子は俺を見てにこりと微笑む。

「もちろん、君も忘れてないよ。天城（あまぎ）秋人（あきひと）君」「そりゃどーも……てか、早くあっちに戻ってくんない? 女子の視線が鬱陶しい」

俺も苦虫を10匹程噛み潰したような表情を浮かべて、さつきから感じる視線の方を指さす。

そこに居るのはさつきまで王子の周りにいた女子共。

王子が俺達と喋っているのが余程気に食わないのか、殺意すら感じる目付きを俺と井原に向けている。正直鬱陶しい事この上ないので助走をつけて顔をグーパーンしてやりたい。

王子は少し困ったような表情を浮かべるが、すぐさまいつもの笑みに戻る。

「あはは……男友達が欲しいと思って話しかけたんだけど、迷惑だったかい？ ごめんよ」

そう言つて王子は軽く頭を下げると、そのまま自分の席に戻り、またも女子に囲まれてキヤーキヤーと黄色い声をあげられている。

「クツソオ……あんだだけモテてりや、人生楽しいと思わないか？」

井原からの憎々しげな問いかけに、俺は考える。

周りを女子で囲まれて、ほぼほぼ女子が身の回りにいて自身に好意を向けてくる。

普通の男ならそれこそジャンピング土下座からの靴舐めを披露してでも手に入れたい立場なのだろう。

「そうだなあ……」

けど、俺はその立場になんの魅力も感じない。何故ならば俺は――

「クソほどどうでもいい」

――女が大嫌いなからだから。

2話

俺は女が嫌いだ。蕁麻疹が出る程に嫌いと言っても過言ではない
何故嫌いなのかと語るとそれこそラノベ一冊分に匹敵するエピソードはあるのだが、特に語りたくない訳では無いのでそれはそれとして置いておく。

「なあ、マジでナンパ付き合ってくんねえの？」

「断固拒否」

放課後、相も変わらずナンパに誘ってくる井原をいなす。

周りには女嫌いを公言していないからこうして井原に誘われる事が多いが、ここまで来るとそろそろ正直に言いたくなる。

だが、それはそれでなんかめんどい事になりそうなのでとりあえずは黙っておく事にする。

「ちくしよー！ なんつー非情な奴だ！ 見てろ、俺に彼女が出来たら遥か高みから見下してくれるわあー！」

「取らぬ狸の皮算用って知ってるか？」

「うるせえ！ 小難しい言葉並べて知的な真似すんじゃねえ！」

「小学生でも知ってる言葉だろ」

「俺が保育園児だったのか!？」

「どういうボケだよ!？」

「クソが!! 今見てろやあー!!」

そう捨て台詞を言い残して走り去る井原を流し目で見送る。

教室居るのは俺一人、残る理由もないので自分の鞆を手にとって帰ろうとした所で、教室の入り口で女子の集団がたむろしているのが視界に入る。

「げっ……」

顔をしかめそうになるがそれを抑え、かかわり合いになりたくないから別の入り口から出ようとする。

そう、今の俺は空気。世界中に存在する有象無象。空気と同化した俺はそのまま教室から出——

「ねえ、そのアンタ」

——ようとした所で、俺の存在に気づいた女子の一人が俺に声をかけてくる。

こぼれそうになった舌打ちを抑え、俺は声の方に振り返る。

少し目付きはキツいがそれなりに美人である。そう言えば王子の周りによく居るなコイツ、名前は知らんしどうでもいいけど。

そんな奴が一体なんの用だ。めんどい……という気持ちを顔を出さないようにし、きわめて普通な態度と言葉で返す。

「なんだ？ ちよつと急いでるだが」

「王子見てない？ いつの間にか姿が見えないの」

「知らん」

女の口から出たのは学園の有名人、王子。

というか、いつも周りをウロウロしてるコイツらが知らないなら俺が知ってるわけないだろう。アホか。

「あっそう。もういいわ」

と、興味が失せたかのような声色で言う女。

……話しかけてきたのは teme エだろうが俺はそもそも teme エに興味の欠片もねえよタコ。と思うが、口には出さずに俺はその場から離れる。

……ほんと、王子も女に囲まれて大変だな。

いやまあ、本人からすればそれこそ薔薇色のハーレムに囲まれてるぐらいなのかもしれんが、俺からすれば悪鬼羅刹の集団に絡まれてるとしか思えない。

今度機会があればジュースでも奢つてやるか……なんて事を考えながら下駄箱で靴を履き替えようとした所で、そう言えば今日、部活の後輩に貸してたゲームを返して貰う日だと言うことを思い出す。

確かあいつ、部室に置いておきますね。って昨日言ってたな……仕方ない、取りに行くか。

そのまま部室棟に歩みを進め、部室に向かっていると、遠くの方で見覚えのある顔がある事に気付く。

「……あれ、王子？」

噂をすればなんとやら、とでも言うべきか。部室棟でなにやら焦っ

た様子でウロウロしている王子こと、園崎輝の姿を見つける。

……なにをしてるんだ？ 王子は確か帰宅部なはず。だから部室棟に来る用事はないはずだが——なんて考えていると、王子の姿を見失う。

「……俺には関係ないか」

王子はもしかしたら女連中から逃げて一人、物思いにふける場所を探しているのかもしれない……まあそんなことより俺の用事だ。王子の事を忘れ、そのまま部室に向かって足を運ぶ。

そのまま歩くと、俺が所属している部活、『パソコン部』の部室の前に到着する。

戸を開けようとした所で、中からモゾモゾと人の気配を感じる事に気がつく。後輩がもう来ているのだろうか。

特にノックとかする必要もないので、俺はそのまま戸を開く。

「よう、貸したゲームはどうだった——」

「……………え？」

部室の中に、後輩の顔はなかった。だが部室には来ていたのか、机の上には俺が貸したゲームソフトが転がっている。

だが、部室には何故か——ブレザーの前を開き、中のシャツをほだけさせている、王子の啞然とした顔があった。

……なんで王子がここに？ なんて思った所で、『ソレ』が目に入る。

王子のはだけたシャツから覗く、こぼれんばかりの白い肉の塊。

……俗に言う、おっぱいである。

「……………や、やあ！ どうしたんだい！ すまない！ 今少し着替えていてだね！ その……ねえ!!」

王子が腕でおっぱいを隠し、焦った様子で何かを言っているが、内容が頭に入っていない。

男である王子に、おっぱいがついている。

なぜ？ 男におっぱいが？ いや待てそもそも男におっぱいなんて力士しかない。

「お、おまつ、まさか……」

わなわなと、震える指先を王子に向けて、俺は思わず叫ぶ。

「——お前女かよおおお!!?」

「う、うわああああああ!!? お、大声で言ってくれるなあ!!」

瞬間、王子に投げられて宙に舞うゲームソフトのパッケージに、顔に感じる痛み。

思考が追いつかない、理解ができない。ただ今わかる事は——
学園の王子が、女だった。という事だけであった。

3話

「……その、すまない。黙らせようと思いつきそれにそれを投げてしまった……怪我はしていないかい？」

「いってーだけで見ての通り血は出てねえよ」

「よかった……いや良くはないか。本当にすまない」

「……まあ、別にいいけどさ」

俺達は部室の机越しに向かいあわせて座っていた。

顔にクリーンヒットしたゲームソフトによる痛みで顔をしかめそうになるが、俺はそれを抑え、目の前の王子を見る。

……いつも通りの整った顔と、シャツ越しにもわかる、いつも通りじゃない盛り上がった胸を持つ王子がそこにいる。

俺に対して申し訳なく思っているのか、眉が下がり俺に対して申し訳なさそうな顔を浮かべている……が、それはどうでもいい。

「……あのさ、単刀直入に聞くけど、お前マジで女なの？」

「……………」

問いに返されるのは沈黙。

いや正直俺だって沈黙したい気分であるし全てを忘れてこのまま家に帰って寝たい。だがそんな事ができる状況ではないのでこうしている訳だ。

しばらく続く沈黙。だが、王子が意を決したような表情をし、口を開く。

「……天城君、君は疲れているんだ」

「シラ切る気だコイツ」

「よく見たまえ、僕の顔を。こんな男前が女に見えるのかい？」

「よく見ると凄い中性的な容姿だよな」

「女だというなら！ 証拠を持ってきて貰いたいものだね！ 天城君！」

「王子、視線を下に向けて自分の胸を見る。焦り過ぎて自分の盛り上がった胸の存在忘れてるぞ」

「……僕は胸だけ太る体質でね!!」

「ねーよ!!」

あまりにも苦し紛れすぎる答えに思わず声を荒らげツツコンでしまう。

自分でも苦しいと感じたのか、王子は大きなため息を吐き、諦めた様子を見せる。

「……そうだよ、見ての通りき、僕は女だ……女、だよ」

全てが終わった。といった感じに絶望したような顔と声色で、王子は白状した。

「だよ、なあ……」

いまだ、驚きを隠せない俺はそう呟くしかない。

……これ、どうすればいいんだ、なんて考えていると王子が頭を抱え、ぶつぶつと話し出す。

「失敗した……完全に気を抜いていた……誰も来ないと思いサラシを巻きなおそうとしたら……どうしよう、どうしよう……これじゃあ、私は……」

「お、王子……?」

「始末……いやそんな事はできない。ならば……かくなる上は……」

「おーい、聞いてるか?」

俺の言葉が届いていない様子の王子は、突如として椅子から立ち上がり、そのまま俺の近くまで来て床に座り込むと――

「頼む!! この事は黙っていてくれないか!!」

――美しいと思うぐらいに綺麗な土下座を披露した。

「いや、別に言いふらす気は」

「お願いだ!! 私に出来る事ならなんでもしよう! だから、だからこの事は!!」

「いや、おい、だから」

「そ、そうだ! さつき言っていたナンパにも付き合おう! ほら、私、顔は整っているからナンパに使うにはいい感じだろう? だ、だから、だからお願い――」

「話を聞けやあ!!!」

あまりにも話を聞かない王子にイラツとして俺は声を貼りあげる。

王子はビクツとした様子だが、また一方的に話し出す前に俺が口を開く。

「いいか？ 俺はお前にどんな事情があるか知らんしお前の秘密をクソみてえな女みたいにベラベラベラ言いふらす気もねえ!! ナンパにも付き合わんでいいしそもそも俺はナンパに興味もクソもねえ!! わかったらさっさと土下座やめて立て！ 椅子に座れ！ 後お願いとか言ってるならガチャガチャ一方的に言うんじゃないで人の話を聞けや!!」

「あ、ああ……わ、わかったよ」

一息に言い切った俺に気圧されたのか、王子はおっかなビククリと言った様子で立ち上がり、席に座る。

「落ち着いたか？」

「一応。なんとかね……」

「よし」

そして俺はもう一度口を開く。

「俺は今日見た事は忘れるし事情も聞かん。オーケー？」

「お、オーケー」

「そして俺はお前に対して要求する事はない。はい復唱」

「……君が私に対して要求する事はない」

「はい、そう言うこと。わかったか？」

「……本当に、いいのかい？」

「いいって言ってるんだろ、クドイ」

「ご、ごめん。……よ、よかったあ……!!」

安心したのか、完全に脱力し王子は机に体を投げ出す。

いつもはキリツとした顔をしている王子だが、今は完全にふやつとした表情を浮かべている。

「首の皮一枚で繋がったとは正にこの事だよ……ああ、安心した……もうダメかと思ったよ……」

「こんな所で着替えてるお前が悪いんだろ。ここは空き教室じゃなくて部室だぞ。せめてトイレかなんかで着替えろよ」

「いや、その、サラシが緩んでしまっただけ……どこか誰もいない所で巻

き直そうとしたらこの誰もいない部室を見つけて……それで大急ぎで巻き直していたら君が入ってきてね」

「迷惑にも程がある」

「……君さ、仮にも乙女の肌を見ておいてその言い草は少し酷いぞ」

「見たくないもん見せられても……」

「かなり酷いな君!」

「じゃあ逆に聞くんが、お前男にチンチン見せられたら迷惑じゃないか?」

「……そりゃあ迷惑だけど……いや、例えがおかしくないかい?」

「おかしくねえよ。チンチンもおっぱいも猥褻物だろうが」

「いや確かにそうだけでも!」

「そしてお前は今チンチンを見せられたら迷惑と言った。つまり、お前のおっぱいを見せられた俺は迷惑と言っても仕方がない。違うか?」

「ぐ……いや、いや待て、チン……が10猥褻物だとしたらおっぱいは0.1猥褻物ぐらいじゃないか? そう考えるとやはりチン……とおっぱいを比べるのはどうかかと」

「デカイゴキブリは100汚物として、小さいゴキブリは50汚物とする。汚さの差はあるが抱く不快感はそれ程変わらない。よってチンチンとおっぱいを比べるのは間違っちゃいない」

「ああ言えばこう言うな君は!」

「ああ言うからこう言い返すんだろうが」

俺の非の打ち所のない弁論に返す言葉もないのか、王子は疲れを顔を滲ませてそのまま黙る。俺の勝ちだ。

「……天城君、あまり目立つ人じゃなかったけど口を開くとここまで濃い人だったなんて知らなかったよ」

「俺も王子が女なんて知らなかったよ……つーか、早くここから出てけよ。そろそろ後輩戻ってきそうだし、その胸見られたらまずいんじゃないの?」

「……あつ」

胸を指さして言うと、王子は慌ててサラシを取り出し、そのまま固

まる。

「あ？ どうした」

「いや、その……巻き直したいから、向こうを向いて貰えないだろうか？」

「あー……了解」

ジロジロ見る趣味もないので、俺は椅子を動かし、王子に背を向ける。

耳に響く布が擦れる音。後ろでは王子がサラシを巻き直しているのだろうが、俺はそれを気にせずポケットからスマホを取り出し、ゲームのアプリを起動する。

……また限定キャラピックアップか。勘弁してくれよ……

「……全く興味がなさそうだね、君」

「さっきのやり取りもつかいやるか？」

「それは、ごめんだね……ありがとう、もういいよ」

その声に反応して振り返ると、そこにはいつもの王子が立っていた。

おっぱいはもうない。王子の胸は男のような平坦な胸へと戻っていた。

……これを見ると、さっきまでの光景が夢なんじゃないかと疑いそうになるが、残念ながらこれは夢ではなく現実である。

「……さて、迷惑をかけたね天城君。……くれぐれも、他言してくれるなよ？」

「わーつてるって。しつけーぞ、言わんと言ったら言わん」

「……君を信じるよ。まあでも、何かしらのお礼ぐらいはさせてもらうよ、でなければ僕の気が済まないしね」

「いや、だからな？」

「では、僕はこれで失礼するよー！」

俺の意思を伝えようとした所で、王子は俺の言葉を遮るかのようにその場から足早に立ち去る。

「……俺はなんも要求しないって言ってるんだろうが……」

……いや、それならもう俺に関わらないでほしい。と伝えるか。そ

れならアイツは俺を気にしなくていいし俺もアイツとの縁が切れる。
……そうしよう。だって、なぜなら俺は――

女が嫌いだから。

4話

「天城イ……俺は、俺は狸だったんだ……」

「なに朝っぱらからアホな事言ってるんだよ」

「取らぬ狸の残尿感……ふっ、こういう意味だったのか。俺はまた、昨日の俺より一つ賢くなったぜ、天城」

「……昨日のお前より三つぐらいバカになってないか？」

翌朝、昨日の王子シヨックの衝撃が抜けきれない俺が教室で目撃したのは、自分の席で真っ白に燃え尽きている井原の姿だった。

まあ、なんでこんな姿になってるのか予想はできるが……

「一応聞いてやるけど、ナンパの結果は？」

「狸の残尿感だよ……」

「意味は全くわからんが失敗した事はわかった。つかー残尿感じゃなくて皮算用だろ。『ざん』しか原型とどめてないぞ」

「うるせえ！ こまけえ事はいいんだよ！」

吠えて少し元気を取り戻したのか、真っ白からグレーぐらいになった井原が大きなため息を吐き、呟く。

「俺はどうすりやモテるんだ……」

「気合い」

「気合いでモテるなら俺は今頃ハーレム王だよ!!!」

俺の適当な返答が気に入らなかつたのか、井原がズイっと顔を近づけてきて耳元で叫ぶ。うるせえ。

イラッときたので筆箱で頭を叩いて井原の顔を押し退けていると、教室の外から騒がしい声が聞こえてくる。

……まあ、毎朝の風物詩だから今更気にする必要はないのだが、昨日、アレを見たからなあ……

なんて、考えていると騒がしい声の元凶が教室に入ってくる。

昨日みたいに胸が盛り上がっていない王子と、そんな王子に群がるうるせー女共。

俺は王子と不愉快な仲間達と心の中で呼んでいる。

「くっ、毎朝毎朝見せつけてきやがるぜ……なあ天城、俺もこう、何か

を見せつけて存在をアピールして行けばいいのか?」

「お前はこれ以上ない存在感の持ち主だから大丈夫だ」

「マジかよー!」

井原を適当にあしらっていると、視線を感じる。

視線の主は、王子。

王子と目が合うと、王子はニコリと微笑んだ後、周りの女子に断りを入れ、俺達に近づいてくる。

……めんどくせえ……

「やあ、どうしたんだい天城君? 井原君が元気を無くした様子だけど」

「お、おう? また王子が俺達に話しかけて来たぞ天城」

二日続けて思わぬ人物に話しかけられて驚いた様子の井原。まあ、俺も昨日の事がなければ驚いていただろう。

だが昨日の事を覚えている俺は、特段驚きはない。

……俺が喋らないか探りに来たんだろうな。

俺は昨日バラさないと信じたが信用出来るかはまあ別だろうし、面倒だが少し話に付き合って、俺が喋らないって所をアピールするか。

「いや、井原が狸の残尿感の話してるんだよ」

「何の話だ!?!」

意味がわからないと言った様子の王子だが、俺は嘘は言っていない。

「まあ、確かに過程を省いたら意味がわからないか。言ってみれば井原」

「そうだな……俺は昨日、ナンパに行ったんだよ」

「そう言えば昨日そんな事を言っていたね」

「ああ、俺はナンパの前、彼女が出来て天城に自慢する未来を妄想したわけだが、結果は惨敗。それで俺は気付いたんだ……ナンパに失敗した俺が描いた未来予想図は、取らぬ狸の残尿感なんだってな……と」

「……それを言うなら皮算用じゃないのかい?」

「細かい事はいいんだよ」

「細かいくないよ!?!」

「王子、結構ツツコミが似合うよな」

「それが似合っても嬉しくないね！」

王子のツツコミスキルに素直に賛美を送るも無下に返される。

「……まあ、とりあえずナンパに失敗したって事だね。いやいきなり狸の残尿感なんて言われたからビックリしたよ」

「これが井原の代名詞の由縁だぞ王子、恐れおののけ」

「……なるほど、理解したよ」

「え、俺の代名詞？ なになに、俺の代名詞って」

王子すら知っているバカの擬人化という二つ名。知らぬは本人だけのようだが、言わぬが花と言うやつだ。

俺は井原の興味をそらすべく、別の話題を振ることにする。

「で、どうしたんだよ王子。俺らになんか用か？」

「いや、まあ……昨日も言った通り、男友達が欲しいというのもあつてね。それで君らに話しかけたわけさ」

そう言つて憂いの帯びた表情を浮かべる王子。

確かにあんなに四六時中女に囲まれてたら男同士の付き合いが恋しくなるだろう。同情もする。

まあそれは昨日までの話だ。

俺は王子が『女』だと知っている。なので女に囲まれてまあ多少はめんどいかもしれないが、男友達が欲しいというのは嘘だろう。

俺のジュースを奢つてやろうと思つた優しい気持ちを返して欲しいものだ。

「そんな訳で、良ければ友達になつて欲しいと思つてね。どうかな？」

井原君、天城君」

そう言つて、握手を求めて手を差し出してくる王子。

……俺には友達になる理由もないし友達になりたくないの断るつもりだが、井原はどうだろうか？

「悪いな、俺達がるのは友達ではなくライバルだ……」

いきなりキメ顔で好敵手扱いしだしたぞこのバカ。

「ら、ライバル、かい？」

「そう!! 学園の王子として女にモテモテな貴様は俺にとってライバル！ 友になるなんて真つ平御免だ!!」

「そ、そうかい……」

真つ向から否定されて流石に王子も困惑顔だ。そして王子の後ろで取り巻き共が殺意に満ちた目で『テメエ何断わってんだボケが』と言いたげな視線を井原に送っているが、当人同士の問題に何をマジになつてゐるんだらうな、アイツら。

しかしやるじゃないか井原。コイツの事だから王子と友達になれば俺もモテを授かれるとか言い出して友達になるかと思つたがまさかの好敵手宣言。コイツにもプライドがあつたんだな……

「だがしかしそのモテのコツを伝授してくれるなら俺と王子は友達の階段を通り越してエターナルフレンズになる事もやぶさかでない」

前言撤回。いつものバカだった。

「モテのコツ……というのはよくわからないが、まあ、身だしなみとかその辺りのアドバイスなら出来る、かな……？ 井原君、きみは顔は悪くないのだし、身だしなみや立ち振る舞いに気を使えばモテるじゃないかい？」

「よし、俺達は今から墓場までのエターナルフレンズだぜ園崎イ！」

「よ、よろしく……？」

差し出した手を握り返されたら困惑気味の王子。

まあ慣れないうちは井原の相手をするところなふう困惑するだろうけど、井原と友達になつたら嫌でも慣れるだろう。

「……こほん、天城君はどうかかな？」

井原と握手を済ませた王子は咳払いをし、仕切り直しと言つた様子で俺に握手を求めてくる。

まあ俺の答えは決まつてるわけで

「パス。友達になる理由ないし」

明確な拒否を言葉で返す。

友達になる気は本当にないし、こうしてお前とは関わりませんよ。と意思と態度で示せばコイツも多少なりとも『俺は言いふらす気も関わる気もない』というのがわかるだろう。

「ちよ、バカか天城！ 王子だぞ王子！ 友達になれば……モテそうだぞ！」

「別に、どういう基準で友達になるかは俺の自由だろう？ 俺は俺が関わってもいいと思っただ奴となら友達になるよ。王子は別に関わらんでもいいと思っただけ。そんなわけで俺はパス」

言外に、『俺は関わる気ないから安心しろ』という意味を込めて吐いた言葉。

王子も俺の言葉に意味に気づいたのか、笑顔を浮かべると——
「あんた、何様？」

突如として、王子の後ろから女が出てくる。

……見覚えのある顔だ。昨日、俺に王子の場所を聞いてきた目がキツイ女だ。

その女だが、俺に対して射殺さんばかりの視線を向けてくる。

……いや、この女だけじゃない。不愉快な仲間達が全員が俺に向けてそんな視線を送ってくる。

不快感に眉をひそめる俺に気づかないのか、女は王子の前に立って話し始める。

「あのね、あんたみたいな奴に王子は友達になろう。なんて言ってるのよ？ それを断るなんて、あんた何様？」

ビシツと俺を指さし、信じられないと言った様子で話す女。

この女からすれば俺は王子の誘いを蹴った無礼な輩なのだろう。まあ、それは仕方がない。イラツときたが無視して乗り切るか……

「大体、王子相手に何その上から目線。あんた自分の立場がわかってるの？」

無視して……

「あんたは下、下の下よ、そんな下の存在が王子にそんな口を叩くなんておこがましいわ」

……

「な、なあ、確かに天城はちよつと口は悪いがそこまで言わなくても……」

「……そうだよ姫宮（ひめみや）さん。それは言い過ぎ——」

流石の井原も困惑した様子であり、王子が口を場を諫めるような言葉を吐こうとするが——

「ああ？ テメエが何様だオイ」

それより先に、俺の口が姫宮とか言うクソアマにケンカを売っていた。

うん、仕方ない。キレた、俺はキレたぞ。

「立場ってなんだ立場って。俺と王子はクラスメイト、立場的には対等だろうが対等。それがなんだ？ 下の下だあ？ お前アホか？

つか、今は俺と王子と井原の三人で喋ってんだよ。それを横から割って入ってきてピーチクパーチクなんだテメエ？ 人の話の邪魔をするなって幼稚園で学ばなかったか？ バカか？ テメエの脳みそが下の下だよ」

「……は？」

「それかあれか？ 人の顔で立場とか決めてるのかお前は？ それなら確かに王子の立場はこのクラスだとトップだな……けどそうなる……姫宮って言ったかお前？ お前なに俺に対して上から目線でぺちやくちやぺちやくちや喋ってんだよ。俺以下の顔面をした女が、俺に対してハゲた口叩いてんじやねえぞオイ」

「は……はあああああ!!」

一度回り出した口は止まらない。

あ、ダメだこれ。自分でも口を止めれそうにない。

顔を真っ赤にして俺に対して反論をしようとしてるのか、口を開こうとする姫宮を遮るように俺も口を開く——

「落ち着きたまえ！ 姫宮さんに天城君！」

「天城ストップ！ なんかストップ！」

——こうとした所で王子に遮られ、井原に口を塞がれる。

「姫宮さん、確かに天城君は言い過ぎだが元々は僕と天城君が話していたんだ。それに割り込んで天城君をこき下ろすのはよくない」

「で、でも……」

「僕の為に言ってくれたのならありがとう。でも、これは僕と天城君の話だから……ね？」

「……はい」

「天城、落ち着いたか？ 手え外すぞ？ 外すぞ？ 外すからな？」

「ふあよふあなあせ（はよ離せ）」

口を塞がれて言葉を止められ、落ち着いた俺はそのまま井原の手を退ける。

そして王子に宥められた姫宮とやらは王子にはうつつとりとした表情を向けつつ、俺を睨むという芸当をやっているが、それを無視する。

……そして周りから感じる俺に向けられる視線。

そりやそうだ、今まで地味な一般生徒だった俺がいきなりこんな口の悪さを発揮したのだ、嫌でも目立つ。

……まあやらかした事はしかたない。そもそも喧嘩売ってきた姫宮が悪い。

「ねえ天城君。この件について後で話し合わないかい？」

俺がそんな感じで全てを姫宮に押し付けようと考えていると、王子から声がかかる。

その顔は真剣味を帯びており、断らせる気はない。と言外に言っていることがわかる

「ここで話を続けるのもアレだろう？ だから放課後、二人で話そう。

……例の件の事で話したい事もあるしね」

最後の部分は、俺にしか聞こえない程小さな声。

まあ、話したい事は俺からもある。よって断る理由もないので、

「了解。じゃあ放課後……昨日の所に来てくれ。今日は俺以外いないから」

「昨日……ああ、なるほど。わかったよ。……さあ皆、席に戻ろうか。騒がしくしてすまないね」

その王子の一声で、教室の連中は自分の席に座り始め、王子の取り巻きの何人かは自分のクラスに戻る為、教室から出ていく。姫宮という女は同じクラスみたいなようで、自分の席に座るとキッと俺を睨み付ける。

「……覚えてなさい」

怒りが滲む声でボソツと姫宮から視線を外し、聞かなかった事にする。

……これは盛大にやらかした感がある……
……ま、スッキリしたからいいか!!

5話

「よう。遅かったな王子」

「すまない。『あんな奴と王子が二人きりで話しちゃいけない!』なんて彼女たちに言われて、ずっと周りにいられたから思いの外撒くのに時間がかったのさ」

「そいつはお疲れ」

「元はと言えば……いや、いい。あれは姫宮さんが悪い。勿論君も言い過ぎだとは思うが」

「俺は事実しか言えないから……」

放課後の部室。

俺と王子は昨日と同じように向かい合わせで座っていた。

確かに言い返した俺も悪いかもしれないが、俺は喧嘩を売られた立場である。なので九割は姫宮とやらが悪い。

「で、話ってなんだ? 大方予想はついてるけど」

昨日、何かしらのお礼とか言ってたしな。別にいらんしこれから関わる気もないから断るつもりだけど。

「そうだね……まず、話す前に一つ、聞きたい事がある」

「ん? なんだよ?」

「……天城君、キミはもしかしなくても女性が嫌いなんじゃないかい?」

確信したような表情で王子はそんな事を言ってきた。

「……………まあ、うん。」

「まあバレルよな」

「そりゃあね……昨日の僕の柔肌を見た時の反応といい、姫宮さんに対する対応といい、そうじゃないかと」

「お前結構昨日の件根に持つてるな」

「こんなナリと言葉使いだが、立派な乙女なのでね」

茶化すように言っているが、目はマジである。

じゃあ男装やめろやと思うが、まあコイツにはコイツの事情があるんだろ。知らんけど。

「まあバレてるみたいだから言うが、俺は女が嫌いだ。だから、さつきも言った通りお前に関わる気は微塵もないから安心しろ」

俺は女が嫌いだ。それは色々事情があつて秘密にしているが……まあ、バレてるなら隠す必要も無い。

それに、コイツは人の秘密をバラす事なんてできないだろう。なにしろ本人が嘘偽りの塊みたいな奴だし。

「……やっぱ、予想通り……ねえ天城君。僕と手を組まないか？」
「……………は？」

いきなり、何を言ってるんだコイツ？

言葉も意味も理解出来ず、哑然とする俺のことなんかお構いなしに、王子は口を開く。

「天城君、僕はこの学園では王子と呼ばれていて、まあ、本意ではあるけど女子にモテている」

「……それがどうした？」

「そこで質問なんだけど、天城君は学校にいる間ほぼずっと、女子に囲まれていたらどんな気分？」

「ブチギレル」

そんなわかり切った事を聞いてなんのつもりだ？

女は嫌いだ。しかも王子の周りにいるような女共に囲まれた日にはそれこそさつき以上にキレ散らかす事だろう。

「……僕も、そんな気分なんだよ」

「は？」

「ハッキリ言おう、天城君。僕も女性が嫌い……とまでは行かないが、苦手だ」

「いや、いきなり何を言ってるんだよ。お前もその、女だろ？ なら苦手って事は」

「女だからだよ!!!」

机を叩き、王子が吠える。想定外の出来事と、王子の大声で驚きで口を挟む事も出来ない。

「いいかい？ 私は今、事情があつてこんな格好で学園に通っているが、肉体的にも精神的にも紛うことなき女だ！ ……だが、皮肉な事

に私の容姿はその、女性に対するウケはいいからこうして女子に囲まれている……

でもね、女が、女にモテても、嬉しくないんだよ……」

沈痛な面持ちで、王子は絞り出すように言う。

いや、まあ、そりやそうだろう。俺だつて同性にモテても嬉しくもなんともないし、その気持ちはよく分かる。

けど、苦手つてはどういう意味だ？ そんな疑問が顔に出ているのか、王子はそれに答えるように口を開く。

「それにさあ……姫宮さんを筆頭にキツツいのが多いんだよ……普通の、普通の女の子ならまだいいよ。でも姫宮さん、あんなじゃん……だから、ほぼずつとああいう感じの人が周りにいると、女子自体が苦手になっちゃつて……」

「あー……」

姫宮、確かに俺も少し関わったただだがぶつちぎりで嫌いである。普通の感性してたらあんな嫌いになる以外ないだろう。

……やべ、思い出したらムカついてきた。

「まあ、姫宮がムカつくのと王子が実は女が苦手、つてのはわかったけど……それが、手を組むこととなんの関係があるんだ？」

そう、こいつが普段どんな気持ちで女子に囲まれてるかは理解出来たし、多少共感できる所があるので同情もする。

が、それと最初に言った事となんの関係があるんだ？

「……私はね、男友達欲しいんだ。……男友達と話す事を口実に、出来るだけ姫宮さん達から距離を取りたいんだ」

「……ん？」

なんだ、なんか、嫌な予感がする。

今ここで口を挟まないと、なんか取り返しがつかない事になる。そんな予感が頭に過ぎる。

少し考え、口を開こうとした瞬間、それを遮るように――

「――天城君、私と、友達になつてくれないか？」

「……………はあ!？」

意味が、わからないことを言い始めた。

「いや待て待て待て、なんで友達になれと？ 意味がわからん」

「言葉の通り、私は男友達が欲しい……それに、私の秘密を知ってて、口外する気がない天城君は丁度いい感じなんだ」

「……いや、そう言われてもだな、さっきも言った通り俺は女が嫌いだ。出来るだけ関わりたくないんだよ。つか、井原と友達になつただろお前」

「天城君が良いんだよ!!」

「意味わかんねえよ!」

「だって天城君、もし姫宮さんが突つかかかって来てもいい感じに？ あしらってくれそうだし……井原君だと、多分そんな真似できないだろうし」

「それ単純に俺をデコイにしたいだけだろ!」

「お願いだよお!! 私、もう学校で女の子に囲まれたくないの!! 穏やかに緩やかに過ごしたいの!」

「は、離せっ!! って力強っ!!」

俺にすぐりついて来る王子を引き剥がそうとするが、意外な事に力が強く引き剥がせない。

くっ、男装してるから筋力も男とどっこいどっこいなのかコイツ!

「大体! 俺に得がないだろうが! あ、てか昨日お礼するって言ってたよな!?! じゃあ俺にもう関わるな! 以上!!」

「いや、いやいや! ちゃんと天城君に対するメリットは用意あるよ! 後それお礼にならないから却下! ダーメ!」

今のダーメ。にイラツとしたがその前に言ったメリット。という言葉に興味が惹かれる。

なんかロクでもない気しかしなが、一応聞いてやろう。ロクでもなかったら腹パンしてここから立ち去ってやる。

「……なんだよ、メリットって」

「……天城君、君、生活に困っているんだらう?」

「……おい、なんで知ってるんだ?」

俺は、諸事情によって少し生活に困っている。

一応金はある事はあるが、無駄遣い出来るほどの余裕はない。

なので、遊ぶ金が欲しい時はバイト等をしているのだが……俺はその事をほとんど周りに言っていない。というか言うほど友達がいない。知ってるのは井原と後輩ぐらいだ。

……と、言う事は……

「すまない、さつき井原君が喋ってくれたというか、勝手に話し出したというか……」

「あのアホ……」

そう言えば昼休み、王子と井原が食堂に飯食いに行ってたな……あの時か、おのれあのバカ野郎。余計な事を。

「そうだな、確かに生活に余裕はあんまない。なんだ、友達代でもくれるのか？」

なんて、冗談混じりで返す。

そう言えば友達代なんて本当にあるのか？ あんなもん払うとかアホらし——

「……月二万でどうだい？」

「お前アホか!？」

「失礼な!？」

なんだろう、王子は見る限りイケメン野郎なのに、こうして素を見てるとただのポンコツ感しかない。よく今までこれで正体バレなかったなコイツ……

「お願いだよお！ 私は、安らぎが欲しいんだ！ 月二万で安らぎが買えるなら、安い物……!!」

「いや、友達代マジで言ってるのかお前……」

二万、二万か……いや確かに友達ごっこして、突っかかって来る姫宮を適当にあしらって月二万ならわりと心が揺れる。

でも友達代で月二万貰うって客観的に見て凄まじくゲスい。

だが二万、ああ、二万……

「……………あー、わかったよ。やってやるその、友達ごっこ」
「ほ、本当!？」

「ただし、めんどくなくなったら俺は辞めるぞ。異論は認めない」
「ぐっ……………いや、それは仕方ない。呑むよ」

「それと、姫宮が突っかかって来たら俺は遠慮なくボロクソに言うぞ。それでもいいな？」

「あ、そこは大丈夫。遠慮いらない」

と、真顔で言う王子。コイツもかなり姫宮が嫌いなんだな……そりやそうか。

「とにかく！ これで契約は成立したね！ じゃあ明日からよろしく頼むよ天城君！」

「来月から友達代よろしくな」

「……自分で言っというてあれだけど、友達代ってかなり嫌な響きだね」「今更か」

かくして、偶然にも王子の秘密を知ってしまった俺は、なにやらとても面倒な事に巻き込まれてしまったのだった。

6話

「よう天城！ 昨日どうだった？」

「よう井原。とりあえずお前今日は俺に飯奢れ」

「なんでだよ!? カツアゲかよ!?」

「勝手に人の家庭の都合を喋ってるんじゃないやねえーよつと」

「痛っ!?!」

相変わらず、いつも通り元気がいい井原に恨みを込めたデコピンを直撃させ、俺は席に座る。井原は非難するような目線を向けてくるが、直ぐにハツとした顔する。

「え、もしかして天城家が金欠なの秘密だったのか？ それならスマン。俺が悪い」

「別にいいけど……まあ悪いと思うならパンでも奢ってくれ」

「悪い、実は昨日近くの服屋でオシャレな服を買い占めたから金がない」

「……オシャレな服？」

「そうオシャレな服。……お？ 気になる？ 気になるよな？ このオシャレに目覚めた俺のオーラ、溢れ出ちゃってるな？」

「いや溢れてるのはアホオーラだけじゃ」

「なら見せてやろう!! このオシャレなシャツを!!!」

「話聞けよ」

俺の言葉なんて聞こえていないのか、井原はブレザーを脱ぎ捨て、中の赤いシャツを見せつけてくる。

シャツには、ダツサイ書体の英語で『I don't speak English』と書かれていた。

「どうよ？ この知的かつオシャレなシャツは？ これでアメリカ女子との出会いも有り得るな」

「……まあ役に立ちそうなシャツではあるな」

これさえ着てれば外国人に道を聞かれる事はないだろう。という意味では役に立つシャツではある。ダサイけど。

「だろ？ ふっ、園崎に言われて、身だしなみを整えた俺はもはや無敵

……ふっ、自分で自分が恐ろしい」

「俺もお前が怖いよ」

「ふっ、怖がるな怖がる……って、違う違う。俺のシャツの話じゃなくて昨日どうだったんだよ天城。園崎と二人で話してたみたいだが」

「あー……」

昨日、昨日ね……井原に言われ、昨日の事を思い出す。

昨日、あれから王子とすぐ別れたが、王子は帰る寸前に「明日から本格的に天城君友達計画を始めようと思う。明日、僕と天城君がとも仲良くなっている姿を教室でアピールする……プランはもう考えてある。なあに、大船に乗ったつもりで居たまえ！」とかほざいていたな……

正直、いろんな意味でフラグな感じしかしないが一応は合わせてやるつもりだ。

女は嫌いだが、月二万は捨てがたい。

「まあ、後でわかんじゃね？ 知らんけど」

「ほーん……」

そんな感じで井原とたわいのない話をしていると、ゾロゾロと教室に人が増えてくる。

その中には姫宮とやらも居て、俺に対して睨みをつけてくるが手でシッシツと払い視線を外す。

……あれ、そう言えば今日は毎朝の騒ぎがないな。

そう思い外した目線をそのまま王子の席に向けるが、王子はそこに居ない。

時計を見ると、授業が始まるまであと5分程。

「ん、どうした天城。どこ見て……あれ、園崎がまだ来てねえの？ 珍しいな」

俺の目線の先に気づいた井原が驚いたように声を上げる。

そう、王子はいつも俺達と同じぐらい、授業が始まる30分前ぐらいには来ているのだが今日に限っては5分前にも関わらずまだ姿を見せていない。

風邪でも引いたか？ なんて考えていると、視界の端にいる姫宮が

立ち上がり。ズカズカと俺に向かって来る。

早速めんどそうなの来たし。

「アンタ、王子になにをしたの!」

「井原知ってるか。スイカって実は野菜の一種なんだぞ」

「嘘言うんじゃないよ。スイカはフルーツだろ」

「いや、スイカの味を思い出せ。どこことなくキュウリに似てないか?」

「……………本当だ!!」

「無視するんじゃないわよ!?!」

ちっ、井原と話して無視を決め込もうと思ったが大声で割り込んで来やがった。

俺は面倒くさげな表情を隠そうともせず、むしろ面倒くささ五割増しな表情を姫宮に向けてやると、そこには怒り八割増しな形相をしている姫宮が真横に立っている。

「なんだよ。今は井原と話してんだけだ」

「どうでもいいわよそんな事! それより、なんで王子が来ないのよ!」

「俺が知るかよ」

「昨日最後に会ったのアンタでしょ!!」

「言いがかり過ぎねえか?」

どうしようか、半分キレそうである。

というかなんだコイツ。俺が王子になんかしたとでも思ってるのか? アホか? 漫画の世界の話か? というか高々来てないだけでこの有り様な姫宮に囲まれてる王子に同情の念が湧く……が、それはそれとして姫宮はムカつく。

こうなったら口撃で黙らせて——

「やあ、おはよう」

瞬間、教室に爽やかな男の音が響く。

いや、まあ、男の声ではないのだが。

もちろんそれは、姫宮に絡まれる原因になった人物の声である

「ほら、来たじゃねえか。おい王子、この面倒くさいのとつとと引き取っ——お前どうした!?!」

王子の姿を見て、思わず叫んでしまう。

教室の連中も、王子の姿を見て目が点になっている。腕には巻かれた包帯。

そしていい感じにかっこよく切り裂かれたブレザー。

更に、昨日まではなかったシルバーのアクセサリー類がブレザーの至る所に装着され、ジャラジャラと音を鳴らしている。

どこからどう見ても、完璧に頭のイカれた、というかちよつとだけイキったヤンキー風な感じのファッションである。

「あ、あの、園崎君？ その、格好は……？」

どうツツコメばいいかわからないこの状況で、姫宮がおずおずと口を開く。

すると王子はフツとキザな笑みを浮かべ、俺を見ると――

「これはね、僕が――天城君と友達になった証さ」

全くもって、意味がわからないセリフ。

教室の連中が説明しろみたいなの視線を向けてくるが、

「いや意味わかんねえよ!」

そんな、俺の叫びは授業を告げるチャイムの音でかき消されたのだった――

7話

「おい、なんだよ、アレ」

「え？ な、なにがだい？」

「その格好と朝の言動に決まってるだろうが!!」

一限目が終わり、俺はすぐさま王子をとっ捕まえて、人気のない廊下まで引っ張っていく。

取り巻き連中も王子の衝撃が未だ抜けないのか、着いてくる様子も王子に近づく様子もなかったのは助かった。

「え、いや、仲良しアピール計画の一つだけど」

「どこが!？」

「ほら、漫画だと男同士価値観の違いで殴り合った後に互いの価値観を認めるみたいな流れあるじゃないか。だからこうして、喧嘩した後というアピールの包帯と、天城君の価値観を認めたアピールで制服をワイルドにし、シルバーアクセサリーいくつか付けてみたんだ」

「そのファッションのどこに俺の価値観があるんだよ!？」

「尖った感じというか、カミソリ感？ ほら、天城君のツンツン感をファッションにしてみたつもり」

「……………り、理解出来ん……………」

脳の処理が追いつかず目眩がする。

なんだろう、もしかしてこの王子……………頭が……………残念なんじゃ……………？
「まあ見ていてくれ! このアピールで僕と天城君の仲良し感をアピールしてみせるさ! それに、今朝姫宮さんが寄ってこなかったから効果があるよ! と、そろそろ授業が始まるから戻ろうか!」
拳を握りしめ、自信に充ちた表情を浮かべる王子はそのまま教室へと戻って行く。

……………不安しかないが、とりあえず様子を見よう。

俺も脳裏に過ぎる嫌の予感をひとまず振り払い、俺も教室へ戻る。

……………ふ、不安だ……………

2時間目。

「そ、園崎君……その、格好は……？」

「先生、これは友情の証ですよ……そう、天城君との、ね……」

「制服、破れてるよ……？」

「オシヤレです」

「オシヤレ」

3時間目。

「園崎、そのアクセサリはなんだ。校則違反だぞ」

「確かに、校則には違反するかもしれませんが……ですが、これは友情の証なんです。そう、天城君との」

「その天城は無言で首を横に振ってるんだが」

「照れ隠しです」

「照れ隠し」

4時間目。

「であるからして……園崎、前に来て答えを書いてみる」

「はい。……こうですね」

「正解だ。流石園崎だな」

「ありがとうございます」

「あの、先生。園崎君の格好に対してコメントは……？」

「あん？ めんどいからパス」

「めんどいからパス」

「王子、お前はおそらくポンコツだ」
「なんで!？」

昼休み、俺は王子を引つ張って校舎の裏に来ていた。

俺の心からの言葉は心外だと言わんばかりに目を丸くしているが、目を丸くしたいのは俺である。

「いやいや天城君。考えてもみなよ。今日は誰も僕に寄ってこなかったじゃないか。つまり、この天城君と関わってイメチェンした路線はかなりいい線してると思わないかい?」

「いいか? 今日のこれは、お前が白線の向こうでタップダンスしてるのを皆が白線の内側からドン引きで見てるような状況だぞ……」

頭に過ぎるのは姫宮を筆頭としたクラスメイト連中の微妙な表情に先生達の理解不能な表情。

あの井原ですら「え? なにこの空気? やばくね?」と察するぐらいには教室の雰囲気はカオスだった。

というか、先生が王子に触れる度に王子が俺の名前を出していたのは友達アピールのつもりなのだろうか。正直やめて欲しいし関わらないでほしい。

「ええー……いけると思ったんだけどなあ……昼休みも教室で天城君達とご飯食べて、アピールしようと思ったんだけど」

「何をどう思えば行けると思えるんだ……?」

ここ数日、王子と接してわかった事がある。

王子は勉強ができる人間ではあるのだが、おそらくコイツは頭がいいポンコツだ。

本当によく今まで女とバレなかったなとしみじみ思う。誰かにサポートして貰ってないとすぐにバレてそうなのに、王子のポンコツ具

合だと。

「とにかくだ、お前の作戦だといわゆる一時しのぎにならない。今はまだ皆その状態のお前に慣れていないから腫れ物を触るような扱いだ。しばらくすれば前と同じ状況に逆戻りだ」

「嘘!？」

「マジだよ。なんせ見た目と言動がおかしいだけで中身は普段と大差ないし、しばらくしたら皆それに気づいて元通りだ」

「じゃ、じゃあどうすれば……」

「そこで、俺もある作戦を用意した。一応友達代で雇われてる身としては、サポートしてやるつもりだ」

もつとも、王子がここまでポンコツだとは思わなかったから急遽練り上げた作戦なので成功するかは微妙だが、少なくとも王子の作戦よりはマシだと思う。

「お、おお……! 流石天城君! 少女漫画に出てくる口が悪いけど面倒見がいいお兄さんみたいだと思ったらその通りだったよ!」

「もつと口を悪くしてやろうかこのやろう」

「泣いちやうから辞めて欲しいね。して天城君、その作戦とは?」

「ああ、それはだな——」

「よう! 待たせたな。購買混みまくってたんだよ」

校舎裏に響き渡る第三者の声、もとい俺が呼んだ人物の声。

声のした方を見ると、そこには紙袋を抱えた井原が走りながら駆け寄って来ていた。

「い、井原君? どうして君がここに……?」

「ん? なんで園崎が? 俺は天城に話があるからって呼ばれたんだが」

「よし、よく来たな井原。まあ座ってくれ。実は王子の悩み相談があるんだ」

「園崎の悩みイ? んだそれ」

「ちよ、ちよつと、天城君?」

王子が俺を見つめ、まさか言う気じゃ。なんて目線を向けてくるが、大丈夫だと小声で返し、俺は焼きそばパンとメロンパンの袋を同

時に開けてどつちから食うか思案している井原に話しかける。

「なあ井原、モテる奴の悩みってなんだと思う?」

「モテる奴の悩みい?? んなのないだろ。だってモテるんだぞ。人生バラ色ハッピーライフじゃねえか」

「いいか井原、それはお前が持たざる者だからそう思うだけだ。モテる奴にはモテる奴の悩みがあるんだ」

「なんだよ、小難しい事言わないでわかりやすく言ってくれ」

「ならハッキリ言うぞ……井原、モテる奴ってのはな——気軽に猥談ができないんだ」

「……………」

その言葉に、井原は目を丸くする。

そしてワナワナと震え出すと大きく息を吸い込み——

「一大事じゃねえかよオイ!?!」

「なんなんだいこの流れは!?!」

王子のツツコミが横から入るが、井原はそんな事はどうでもいいと言った様子で封を開けたバンを紙袋の中に戻し、俺に詰め寄ってくる。

「ま、マジか、マジでエロい話が出来ねえのか?」

「ああ、女子に常日頃囲まれてる王子は迂闊におっぱいも言えないんだ」

「マジかよ……腰のくびれのエロさもか?」

「言えない」

「体育の時にチラツと見えるへそのエロさも!?!」

「言えない」

「こう、夏休み明けに制服の間からチラチラ見える日焼けした肌としてない肌にムラつと来る話も!?!」

「言えない。てかお前結構性癖特殊か……?」

「細かい事はいいんだよ!!」

そう言い捨てた井原は勢いよく王子に近づくと、両手で王子の肩を掴む。

「そうか……園崎も苦労してるんだな……モテる奴は、大変なんだな

オペレーションW

その日、教室の空気はなんとも不思議な物だった。

姫宮梨花花はその空気になんとも言えない不快感を抱えながらも平常心を保ち、弁当へ箸を向ける。

「ねえ梨花花ちゃん、王子、どうしちゃったんだろう……?」

「……………わからない」

友人からの問い掛けに梨花花は長い間を置いてから絞り出すように答える。

実際、脳を絞り出るかと思うぐらい彼女は考えた、考えたのだが、それでもわからない事はある。

学園の王子こと、園崎輝。

そんな王子の様子が、朝からとてもおかしい事に梨花花は頭を抱えていた。

(…………元々、変な所はあったけど日は輪をかけておかしい…………)

その理由は、と考えて彼女の頭に一人の男の姿が浮かぶ。

天城秋人。昨日人様に向けて罵倒を浴びせた男だ。

元々、彼女にとって天城は井原と絡んでいるぐらいで特に目立つ生徒ではなかった。強いて言うなら、伸びた前髪で顔がよくわからない事と、女子生徒とあまり会話をしていないぐらいだ。

例えるならばモブという言葉が似合う男。というのが、昨日までの姫宮の認識だった。

「それにしても、あの天城って奴何様なんだろうね。王子や梨花花ちゃんに向かってあの言葉使い…………」

「そうね…………天城、秋人…………っ!」

友人の口からその男の名が出て、姫宮は手に持っている箸を強く握ってしまう。

そう、モブだと思っていた男は、とてつもなく口が悪かった。

確かに、当人同士の話に首を突っ込んでしまったのは王子にも諷められ、少しだけこちらが悪いと姫宮は思う。

だが、あそこまでの暴言が帰ってくるとは思っていなかった。まさ

か、男の口から「自分以下の顔面」と言われるなんて夢にも思っていなかった。

彼女は自分の容姿にそれなりに自信がある。少し目付きがキツイと言われるのがコンプレックスではあったが、それでも客観的に見て美人の部類には入ると思っていた。

だからこそ、それを「自分以下の顔面」と切り捨てた男にはやはり怒りが収まらない。

更に言うならば、おそらく王子がおかしくなった一因であるので文句をぶつけてやりたい。

結論を言うと、姫宮梨々花は天城秋人という男が大嫌いである。

そして、当の天城秋人は昼休みになるやいなや王子の手を引っ張ってどこかに行行ってしまった。

次は一体何をやる気なのか。戻ってきたら一言文句をぶつけてやる。と姫宮が決意を新たにしていると、

「天城よお、俺昼休みの度に思うんだが、早弁すりや昼休みもつと長く満喫出来ないか?」

「いや、どういう事だよ……」

「だってよお、飯食うのに30分掛かるとしたら、もう昼休み半分終わってんだろ? 30分しか休めねえじゃん」

「いや飯食うって行為は休む事に入るだろ?」

「え? 飯食うって休みじゃなくて食事だろ? どうした天城、ボケてんのか?」

「……俺がおかしいのかコレ!?!」

「いや僕も意味がわからないよ……」

教室の外から、なんとも脳天気な声と、聞き慣れた声と、腹が立つ声、三人の声が姫宮の耳に運ばれる。

姫宮が声の方に目を向けると、そこには井原、王子、そして天城秋人の三人が教室に入って来ていた。

相も変わらず、王子のファッションは個性的ではあるが、井原の相手をしているからか今朝のような気取った演技臭さはなく、姫宮から見るとまだいつもの王子に近い。と言った感じだ。

これは、近づくチャンスだろうか。

そう思った姫宮はいつの間にか空になっていた弁当箱を仕舞ってから立ち上がり、三人組に向かって足を進める。

(まず、王子から本当になにがあつたか聞かないと……たぶん、十中八九は天城秋人のせいだと思うから今日こそは問い詰めて……それから……)

なんて事を姫宮が頭の中でまとめていると――

「そんな事より井原君。その……ええと……その、だね……おっぱいの話でもしないかい？」

――空気が、凍った。

王子達三人を除く、教室にいる全ての人間の時が凍りついた。

今、王子の口から出た言葉はなんだ？ 教室にいる人間全てが考える。

おっぱい。そう、おっぱいである。

これが胸、という言葉だったらまだ大胸筋の話かもしれないと思う事ができただろう。だが、王子の口から出た言葉はおっぱいである。

理解ができない、意味がわからない。姫宮を筆頭に教室に居る人間はそう思うしかない。

「おっぱいの話か……いいよなおっぱい、おっぱいって単語だけでもう、おっぱいだよな……」

「そうだね、おっぱいだね」

「おっぱいだな……これは噂で聞いたんだが、ビニール袋に水入れて袋を括ると、おっぱいに近い感触になるらしい……」

「……車から手を出した時、手に感じる感触もおっぱいに近いみたいだよ」

「マジかよ!! じゃあこれは知ってるか？ 膨らませたほっぺたの感触がおっぱいに近いって事を！」

「ええ？ それはさすがに………本当だ、似てる……」

「ふっ、俺の勝ちだな園崎……」

「いやなんでお前らそこまでおっぱいの知識持ってるんだよ」

「男なら当たり前だろうが!! なあ園崎！」

「……そうだね、男なら、当たり前だよ天城君！」

「こいつやけくそになってる」

凍りついた所に、追い討ちをかけるように続けられる王子と井原のおっぱい談義。

意味がわからない、理解ができない。

されど姫宮は意識を呼び戻し、教室の人間の総意をその口で言う。

「……………なんなのこれ？」

姫宮が消え入りそうな声で呟いたその言葉に、三人を除く教室の間全てが「それな」と、同意するしかなかった。

かくして、オペレーションW。もといオペレーション猥談によって王子に近づく女子が少し減った

8話

「よし、大成功だな」

「どの辺が!？」

放課後、若干溜まり場と化してる感じのある部室で俺と王子は向かい合って座っていた。

そしてその横で井原がパソコンでマインスイーパーに熱中している。というかマインスイーパーとかまだあるのか。

「いやどう考えても大成功だろ。思い出せよあの女達のドン引きした目線。どっから見ても大成功」

「仮に大成功だとしても払った犠牲が大き過ぎないかい？」

「ほら、何かを得る為にはそれ相応の対価が必要とかなんか漫画が原作の映画で言ってただろ。」

「等価交換ですらないよ……」

「へへへっ……世が世なら俺は地雷ハンターとして名を馳せただろうな……この平和な世に感謝しろよ、地雷」

井原がマインスイーパーをしながら自分の世界にトリップしている隙に、俺は王子に向けて小声で言う。

(実際、こうやって井原とアホな話で盛り上がるのは良い手だぞ。女子はまず離れて距離をとる)

「おおっと、こんな所に隠れてやがったのか……だが、甘いぜ?」

(いや、私が恥ずかしいというか……ねえ?)

「地雷処理士の俺は、まずは外側から攻める! ナンパと同じさ、まずは、外側から突き崩す!!」

(そのファッションの方が恥ずかしいからな??)

「残るは、この2マス……だが俺にはわかる、最後の地雷は……このマスだ」

(ええ……?)

「さらば地雷、いや、マインちゃん……来世はかわいい女の子になって俺の元に来い……ゲーム、セットだ」

「つかさつきからどれだけマインスイーパーに感情移入してんだよ

!!

「……………はっ！ あ、あれ、俺はさつきまで、荒野でマインちゃんをスリーパーしていたはずじゃ……」

「感情どころか意識が別世界にトリップしてないかい…………？」

「ん、あれ、どうした天城に園崎、しんどそうな顔してんぞ、大丈夫か？」

『むしろお前（キミ）が大丈夫か…………』

「？」

頭にはてなマークが浮かんでそんな気の抜けた表情の井原に俺と王子は脱力しそうになるが、俺は井原をここに呼んだワケを思い返す。

俺は井原を巻き込むつもりである。

正直俺一人で王子の状況をどうにかする事は難しい。なので、丁度王子と友達となった井原も利用、もとい使って王子に近づく女子を少なくさせる。

それに、王子はまだ、まだマシな部類ではあるが、やはり俺は女が嫌いである。なので井原と仲良くさせて俺との絡みを緩和させるつもりだ。

「とりあえずだ井原、これから王子も行動を共にする仲になる」

「はあ？ 友達なんだから言わんでも行動を共にするだろ普通」

何言ってるんだコイツ。とでも言いたげな表情を浮かべる井原。

コイツ、バカである事と女好きである事を除けば本当に裏表がないというか、良い奴なんだよな。

そんな井原を少し騙しているようで心苦しいが、俺はそのまま口を開く。

「まあ、実は言う王子は友達がいけないボツチだから、今までのボツチ期間を霞ませる為に俺達と絡みまくりたいらしい」

「マジかよ。苦労してるんだな園崎」

王子はなにかを言いたげだが、それを無視して俺は言葉を続ける。

「てなわけで、これからもつと話して仲良くなりたいてよ」

「俺は元からそのつもりだぜ。なんせ王子にはモテの秘訣を教わらな

いといけねえからな。そのファツションとかモテるのか？　なんか天城との友情かなんとか言ってたけど」

「ふっ、モテではないが、これは友情を表すファツションでね……ほら、この尖った感じのファツション、天城君っぽくないかい？」

「あー、そう言えば天城つて結構尖ったナイフつて感じあるな……本当だ、天城ファツションだそれ」

「俺をその痛々しいファツションと同列に扱うのやめろ」

そもそも俺は多少口が悪いだけで尖ってるつもりはないので心外である。

というかこの二人、なんか地味にベクトルが似てるあんぼんたんな気がする。

「てか見ろよ王子、俺のシヤレオツなシヤツを。めちやくちやモテそうじゃね？」

「おお……いい感じに自己主張が強いシヤツだね。モテるかはともかく、中々良いね……」

「だろ？　だろお？　へへっ、どうやら俺達のセンスは似てるみてえだな……」

「そのシヤツ、肩の所を切ってギザギザにすると自己主張感が更に出ていいんじゃないかな。井原君にとても似合いそう」

「おまつ!!　天才かよ!!　思いもよらない発想だぜ……流石王子のファツションセンスだな、最先端だぜ……時代を横取りしてやがる」「い、いやあ、そんなに褒められると少し照れるな……」

俺のツツコミをスルーしそのままファツション談義で盛り上がる二人。

なんだろう、コイツら二人が仲良くしてればそれで全部大丈夫な気がしてきた。

……いやまあ、雇われの身みたいなものだから俺も手伝うけども。「と、いけねえいけねえ、ファツションの話は天城にはわからねえみてえだしこの辺りにしとくか。んでよ、とりあえず園崎と仲良くすりゃいいんだろ？」

「そうそう。どれだけ仲良いか周りにアピールして行け」

「うし、そんじや改めて頼むぜ園崎。あ、後、俺は呼び捨てでいいぞ。男に君付けされんのはなんかムズムズする」

「……うん、わかったよ井原。改めて、今後ともよろしく頼むよ」
「おうー」

照れ臭そうに笑顔を浮かべる王子とニカツと曇りない笑みをして
いる井原。

案外いいコンビだなこの二人。

やっぱり井原を使うのは我ながらナイスアイデアだ。サンキュー
井原。

「んで、周りに仲良いアピールしても、なにすりゃいいんだ？ また猥
談っとくか？」

「猥談はしばらくもういいかな!! それに、あんまり猥談してると女
子が寄ってこないから控えよう!」

「マジか!? しばらく辞めるわ!」

「……仲良いアピールなあ……」

思いの外オペレーションWが嫌だったのか、全身全霊といった様子
で拒否を示す王子とあつきり丸め込まれる井原。

まあ、確かにオペレーションWを続けてやるには時期早々である。

初回のオペレーションWは王子が猥談をするというインパクトと、
ノリノリの井原で誤魔化せただろうが、二回目以降は周りも多少『慣
れる』。

するとだ、王子の様子をよく見ると、猥談にそれ程乗り気じやない
とバレ、『猥談に乗り気じやないのに無理矢理付き合わされてる王子
かわいそう』と思われる可能性がある。

なので、オペレーションWは続けてやる物ではない。

だが、次何をするかと言われると、考えつくのが三人でアホみたい
な話をして王子のイメージを下げるぐらいだ。

俺だったらイメージとかどうでもいいから女子に「近づくなウザ
イ」で全てをシャットダウンするんだが、王子はあくまで女子と距離
を取りたいだけで、決別したい訳ではない。

だからまあ、こうして策を考えているわけだが……

「中々いい案ないな」

正面衝突ならいくらでもやりあえるのだが、そうはいかないので難しい問題である。

「なあ、ちよつといいか?」

「ん、どうした井原」

思案していると、井原から声がかかる。

「普通にさ、仲良いアピールしてえなら一緒に遊んでるみたいな事やりゃいいんじゃないの? 一緒にゲーセンとかカラオケ行つてるぜー、みたいな」

「……あー、なるほど」

確かに、普段も遊んでるといふ事を周りが知れば仲良しアピールになるだろう、井原にしてはナイスアイデアである。

けど王子はどうだろうか。コイツは学校でひとまず女子と距離を置きたいだけ。外で俺達と遊んでその話を学校ですれば仲良しアピールにはなるが、そもそも王子は女である。

女と男で遊んでも――

「いいね!! すごく、すごくいい!! いつ遊ぶ? 放課後と休日は大体暇だよ!!」

思いの外乗り気な王子が、机を乗り出して食い気味に言ってきた。

「え、あー、ど、どうするよ天城? 俺も基本的に暇だけど」

井原もあまりにも乗り気な王子に驚いたのか、少し困惑した様子で俺を見る。

いや、正直俺も王子が乗り気過ぎて困惑しているのだが……なんて事を考えてる俺を急かすように見つめてくる王子。

なんだろう、王子に尻尾があるならブンブン振ってそうなら目にキラキラしてる。

「今日は無理。明日は土曜日で学校もバイトもないし俺も行けるが」
「よーし! じゃあ明日、明日の朝10時集合ね! 一日遊び倒そうよ!!」

「おう!! なんでそんな元気になったか知らねえけど、遊び倒すか!!」
「いえーい!! それじゃあ私、帰って明日に備えるね。二人共、また明

日!!」

そう早口で、楽しげに言い残した王子はそのまま風のように去っていく。

あいつ、どんだけ楽しみにしてるんだ……？

「……ん？ そう言えば天城、待ち合わせ場所とかどうすんだ？ 俺

園崎の連絡先知らねえぞ」

「あつ……俺も知らない」

「えっ？」

5分後、その事に気がついた王子が息を切らして戻ってきて、「絶対明日遊ぶよー!!」と再度うれしそうな表情で俺達と連絡先を交換すると、今度こそそのまま帰って行った。

……本当、今までよく女である事を隠し通せたな王子……素が、残念すぎる……

9話

「おーい、起きろ兄貴。さつきから目覚まし鳴りっぱなし。どんだけ爆睡してるの?」

「ああ……?」

カーテンの隙間から差し込む光と、俺を呼ぶ声で意識が眠りから浮上する。

目を開けると、そこには目覚まし時計を持ってこちらをのぞき込んできてるパジャマ姿の妹、天城冬華（ふゆか）。

「……あれ、お前学校は? 制服着てないけど休みか?」

「……どんだけ寝ぼけてるのさ。今日土曜日だよ、土曜日。むしろ兄貴こそなんで休みの日の朝から目覚まし時計鳴らしてるの?」

そんな呆れた様子で言う冬華を見て、モヤがかかった意識が今度こそハッキリする。

そうだ、今日は井原と王子と遊びに行く日か。寝ぼけてその事がすっ飛んできた。

「今日は用事で出掛けるから朝早くに起きたんだよ。つか目覚ましで起こしたか? 悪いな」

「いいよ、起きる時間だったし……てか仕事? そんな休みの日まで働かなくてもいいんじゃない?」

「違う。遊びに行くんだよ」

「へー、ならいいけど……しかし兄貴が遊びに行くなんて珍しいね。もしかして……遂に女の子と遊びに行っちゃったり?」

「……いや、違う」

「……あれ、その間、もしかして本当に?」

「違うからな。井原ともう一人別の知り合いだからな。それに俺の女嫌いお前知ってるだろうが」

「知ってるけどー、こう、妹としてはやっぱり兄が女嫌い。なんて気取ってる感じはあまり嬉しくないわけで」

「やかましい。っーか着替えるからさつきと出てけよ」

「はーい。まっ、兄貴の女嫌いは知ってるけどさ、徐々にでも治した方

がいいわよ……そんなわけで、井原さんとその女の人と楽しんできなよ！」

「だから、違うと言っとろうが」

人の話も聞かずに荒らしのように去っていった妹を尻目に、俺はクローゼットの前に立つ。

全く、大きなお世話だ。妹でなければ……いや、まあいいか。

というか人の心配をするより冬華こそそろそろ彼氏でも作った方がいいのではないだろうか。アイツももう中3である。そろそろ浮ついた話があっても良さそうなのだが、「三次元より二次元の方がいいじゃん」と言っただけイケメンの男が描かれた恋愛ゲームを取り出して来た事は記憶に新しい。

……そう言えばあのゲーム、冬華曰く主人公も男らしい。

男と恋愛するゲームの主人公が男。何やら俺にはわからない世界であるが、まあ冬華がそれでいいなら俺も深くは聞かないし知ろうとしないでおこう。

なんて事を考えながらクローゼットを開くと、扉の内側に付いたがら鏡に映る自分の顔を見てしまう。

「相変わらずひっでえ顔だな」

鏡の中で不機嫌に歪む自分の顔を前髪を整えて隠し、適当に取り出したジーンズとパーカーに着替え、待ち合わせ場所に向かう事にする。

……ふと思う、そう言えば王子と井原の素のファッションセンスはあまりよろしくない。

そして今日は、みんな私服で街に繰り出す。

……嫌な予感が止まらないしこのまま布団に潜り込みたい気分だが、だが、脳裏によぎった諭吉二人の為に、俺は待ち合わせ場所に向かうのだった。

「ようー！ 早いじゃねえか天城！ まだ30分前だぞ」

「いやそう言うお前も早い……なんか今日の服装普通だな」

早めに着いたので、待ち合わせ場所である駅前の広場でスマホを弄りながら待っている、いつも聞いてる底抜けに明るい井原の声が聞こえてくる。

今日はどんな服装だ、と思いつつ見ると迷彩柄のカーゴパンツに、なんかかっこいい鳥が描かれた赤いシャツを着た井原が居た。

昨日のクソダサイングリッシュシャツとはえらい違いである。

「いや、昨日の俺のオシヤレアメリカンシャツ、ぼーちゃんが気に入ったんだよ。で、欲しがってたからぼーちゃんにあげたら、かーちゃんがこれくれた。んで折角だから着てきたけどやはりかーちゃんのセンスはオシヤレとは程遠い……」

どうやら井原のぼーちゃんとかーちゃんがフラインプレーを決めたようである。良かった、いろんな意味で助かった……。

「まあそれはそれでありなんじゃねえの？ つか井原早いな、どうした」

「ふつ、俺は女の子との待ち合わせの時は一時間早く、男との待ち合わせの時は三十分早く来るようにしてるんだよ……時間にルーズな男はモテねえからな！」

「まあ理由はともかくいい事だな」

果たして井原は今後、待ち合わせの時間一時間前に来るような機会があるのだろうか？

そんな夢みたいなお光景に思いを馳せていると、少し向こうこちらに向かつて走ってくる金色の頭が見える。

「ごめん!! 待ったかい!?!」

勿論それは王子である。

王子は俺達が早く来てるのが予想外だったのか、驚いた表情で俺たちの元に来る。

さて、王子の格好はと言うと――

「いや、二人共早いね……僕が一番かと思っていたんだけど」

青いジーンズに、シンプルな黒い無地のシャツに合わせるように身

につけられたシルバーのネックレスは昨日と違って痛さはなく、オシャレ感が出ている。

そして体のラインを隠す意味もあるのだろうから、シャツに合わせてような見に纏っている白いジャケットは王子にとっても似合っている。

シンプルな格好ではあるが、本人の顔の良さも相まってとても王子みみたいなオーラが醸し出されている。

昨日とは、雲泥の差である。

「いや、俺らも今来た所……王子、その格好どうした？」

「え？ なにかおかしいかい？ できるだけメンズのファッション誌にありそうな格好にしたつもりなんだけど」

「うーん、もっとシャツに主張が欲しいな。胸の辺りにバスケットボールぐらい描いて欲しいな」

「……なるほど、確かにいいね」

「ファッションの話はもういいから」

「またもファッションで盛り上がりそうな二人の間に割って入り、会話を打ち切らせる。」

まあなんにせよ二人共普通の格好でよかった……どんな奇天烈ファッションで来るのか気になってたので少しだけ残念な気持ちもあるが。

「で、どこに遊びに行くんだ？ 待ち合わせ場所しか決めてないが」

「昨日、集合場所と時間は決めてあったがどこに遊びに行くかは決めてはいなかった。」

「普通ならカラオケとかゲーセン辺りだが。」

「男三人揃えばやる事は一つ!! ナンパだあ!!」

「パス」

「パスかな」

「んでだよ!?!」

井原の提案を速攻で蹴る。

「まだ文句がありそうな井原が口開く前に、俺は提案する。」

「まあ今日はカラオケとかそんなのでいいだろ。それに井原、お前この前自分で言ってたけど、王子連れてナンパしたら女は皆王子に取ら

れるぞ」

「あつ、そうか……クソつ、やはり世の中顔か……」

「ふ、複雑だなあ……」

嫉妬に充ちた井原に見られて困った様子の王子を見て、女なのにそんな嫉妬されて気の毒だなと少しだけ思う。

まあ表向きは男なのだから仕方ない事だ。自分のその立場を恨め王子よ。

「で、どうする？ カラオケにはまだ早いし、適当にゲーセンでも行くか？」

「まあそれでもいいぜ。ふつ、俺のハンドル捌きを見せつける時だな……」

「あー、すまない。ちよつといいかい？」

ゲーセンに決まりかけた所で、王子が手を上げて言う。

「実は、行きたい場所があるんだけど……そこでもいいかい？」

「まあ行きたい場所あるならそこでも良いが」

「んで、どこに行くんだよ園崎。お高いお店なら俺と天城は公園で日向ぼっこするしかねえぞ」

「ふふつ、どこに行くかと言うとね——」

目の前に広がる大きなカラフルな門。

その門の前の大きな広場から聞こえてくるのは楽しげな親子連れやカップル達の声。

まるで、ワンダーランドを思わせる穏やかな穏やかで平和な光景。

……まあ、平たく言うと

「この遊園地で遊ばないかい!!」

『男三人で?!?!?』

珍しく、井原と一緒に突っ込んでしまったのだった。

かくして、男三人（なお一人は実は女）で遊園地という、表から見ると悲惨な休日^が幕を開けたのだった。

10話

「マジかよ……俺、遊園地は彼女とのデートで行くと誓ってたのに……」

「井原ガチ凹みだぞ、どうすんだよオイ」

「そ、そんなに？ いやでも、遊園地って普通じゃないかい……？」

（男三人集まって遊園地はないと思うぞ。女同士ならわかるけどな）
（……あつ）

小声の指摘に王子はハツとした顔を見ると、やらかした。と言いたげな表情を浮かべた。

俺もそこまで遊ぶ事はないが、男三人で遊園地は流石にないと思う。

それに気が付かない王子は余程気が抜けていたのだろうか……まあ、昨日気持ち悪いぐらいテンション高かったしなあ……浮かれて色々すっぱ抜けてたんだろう。コイツ素はかなりのポンコツみたいだし。

「す、すまない。どうしよう、やめておこうか……」

「って言ってもだなあ……」

周りを見る。後ろに広がるのは外へと続く門、そして前に広がるのは数多のアトラクションに遊園地内で風船とかを配ってる猫みみたいな着ぐるみ。

俺達はまだ遊園地の中にいるのだ。今更引き返すのはなんだか勿体ないし、それに

「折角王子が年間チケット？ くれたんだし、俺はココでいいぞ」

そう、王子はあらかじめ俺達の分のチケットを持っていたのだ。

つまり王子は元からここに来るつもりだったんだろう。

というかこのチケット一枚で一年間入り放題とは、凄いな年間チケット。

「いや、チケットはタダみたいな物だから気にしなくていいよ。だから他の所行くなならそれでいいよ」

そう口では言っているが、俺は王子がさつと後ろに遊園地のパンフ

レットを隠した事と明らかに落ち込んでいる表情をしている事を見逃していない。

「……………めんどくさい奴だなあ、本当。」

「そういう事を言うならもうちょい表情取り繕えつての。それに俺は別にどこでもいいし」

「い、いやでも、井原君かなり落ち込んでないかい……………」

王子が指さした先に居るのは、地面に手をつけて「男三人で…………遊園地…………俺の夢が…………」と、本気で落ち込んだ様子の井原。

「ママー、あのおにいちゃんくるしそうだよ？」

「シツ！ 見ちゃいけません！」

道行く親子連れに警戒されてる井原に関わりたくないという念が湧くが、このままにしておく訳にはいかなないのでここでいっちょ王子に井原の扱い方というのを見せてやるか。

「なあ井原、確かに男三人で遊園地って虚しいよな」

「虚しすぎるわ!! クソっ！ こうなりや遊園地の中でナンパだナンパあ！ 何が悲しくて男三人で遊園地なんぞ——」

「だが考えろ井原、お前は遊園地について何を理解している？」

「…………理解イ？ なんだよ、どういう事だよ」

「例えばだ、今回お前は女と二人で遊園地に来たと仮定しよう…………その時、お前は女を楽しませる事が出来るのか？ 一度も来た事がない遊園地で」

「——はっ!!」

「気づいたみたいだな…………よく聞け井原、女つてのは基本的に自分が楽しけりゃいいと思ってる生き物だ。それで、もしお前が遊園地について何も知らないから女を楽しませる事ができなかつたとする…………するとどうだ、女は確実にお前を毛虫のごとく嫌う。なにせ女だからな…………ケツ」

「いや、それは流石に偏見じゃ…………」

横から王子が口を挟んでくるがそれを聞こえなかつた事にして、そのまま耳を傾けてくる井原に弁を振るう。

「だが、今回女はいない。野郎だけの遊園地でいくら失敗しようが女

に嫌われる事はない。……だからこれは、予行演習だ。いつかの未来、有り得るかもしれない未来で井原が女を楽しませる為の予行演習だ」

「そういう事かあ!!!」

俺の言葉が響いたのか、井原は目に輝きを取り戻す。

「つまり、この失敗しても大丈夫な状況で遊園地を知れってわけか……ふっ、敵を知り己の尻を百叩きとはよく言ったもんだぜ……」

「それを言うなら敵を知り己を知れば百戦危うからずじやないかい？」

「こまけえ事はいいんだよ!! しゃあ! そんなじゃあ遊ぶか! 遊園地、俺が知り尽くしてやるぜ!!」

すつかり調子を取り戻した井原。

ちよろいもんだぜと内心ほくそ笑み、そのまま王子に向き直る。

「そんじゃ、井原も元に戻った事だし遊園地で遊ぶぞ王子」

「……本当にいいのかい？」

「クドイ。つか本当はここで遊びたいんだろうが。んなとこで気い使わんでいい」

どうせ気を使うならもつと別の所で使って欲しいけどな。主にサラシを巻き直す場所とか。という言葉を続けようと思っただが、王子の顔が喜色に染まった表情を浮かべているので余計な水は差さない事にする。

「よかった! なら、お言葉に甘えて今日はここで遊びまくろうよ!」

王子スマイルではなく、素の女性的な笑顔と言葉で言う王子に、コイツ性別隠す気はあるのかと頭を抱えそうになる。

……というか、普段は『僕』と言ってるけど焦ってる時とかテンション上がってる時は『私』って言ってる時が多いんだよなあ。

「まっ、実は言うとうと遊園地に来たのはたぶん小学校以来だから地味に俺も楽しみなな」

「……そう言えば、俺もたぶん小学校以来だな遊園地」

俺の言葉に続く形で井原が言う。

つか、井原に偉そうに遊園地講釈垂れたが、俺自身も遊園地の楽し

み方とか全然知らん。まあ、自信満々で遊園地を推してきた王子に頼れば大丈夫か。

「それに、遊園地って尚更どう楽しむんだ……？ 園崎ならわかんなか？」

「確かに、俺と井原は遊園地弱者だから遊園地の楽しみ方がわからないからな」

なのでここは自信満々に遊園地を推してきた王子に頼るのが一番だろう。遊園地弱者コンビが王子に期待を込めた視線を送る。

「遊園地の楽しみ方、かい……？ え、ええと……そうだね……」

困った様子で宙に視線をさまよわせる王子。

どうしたんだらうか。なにやら想定外の出来事に戸惑っているよ
うな様子だが……

(……あれ、女同士ならまだわかるけど、男の人ってどうやって遊園地を楽しむんだ……？ あれ、あれ……？)

なにやらブツブツとつぶやく王子。

マジでどうしたんだコイツ。まさか、王子も遊園地弱者で楽しみ方を知らないとか？ いやまさか、いくらコイツがポンコツでも楽しみ方を知らない所を自信満々で推すわけないだろう。

数秒、視線をさまよわせた王子はある一点を見つめる。

その視線につられた俺達も王子が見ている一点に視線が吸い込まれる。

そこにあるのは空中でねじれ曲がったレールを高速で走り抜けるアトラクション。

俗に言う、ジェットコースターとやらである。

(男同士の遊び方なんてわからない。でも、二人を誘ったからにはなんとしても楽しんでもらわないと……うう、私は嫌いだけど、ジェットコースターとか男の子好きそう……と、とりあえず適当に遊び方を……)

それを見た王子は息を飲み、そして意を決したような表情で口を開く。

「男の遊園地の楽しみ方、それは——チキチキ耐久ジェットコースターループだ」

『チキチキ耐久ジェットコースターループ?』

チキチキ耐久ジェットコースターループ。

それは男同士で遊園地に行くと、必ずやると言われるぐらい定番な遊び方だそうだ。

どんな遊び方言うと、己の体力が続く限りジェットコースターに乗り続ける遊びだ。そんな遊びを、俺達はする事になってしまった。その様子をダイジエストでお届けしよう。

1回目。

「きやああああああああああああああああああ!!?」

「王子うるせえええええ!!! つかはやあ!？」

「すげー!! たけー! はえー!! 風が気持ちいいなあ!!」

2回目。

「いやー! やだー!! 帰る! お家帰る!」

「なんか慣れたら結構楽しいな」

「俺は……風になるっ!!」

3回目。

「……死ぬ……」

「なんか気持ち悪くなってきた」

「吐きそう」

4回目。

「大きな星が、ついたり消えたりしている……彗星かなあ? いや違

う、違うね。彗星はもつと、バーって動くもんね！」

「バーってうごいてるのおれたち」

「おれはさつきバーってはいた」

5回目。

「……………」

「……………」

「……………」

「なあ…………天城イ…………園崎イ…………俺に遊園地は無理なのかもしれない…………な」

「俺も…………こんな無理…………」

「たすけて…………たすけて…………」

6回目に赴こうとした俺達三人だが、三人共膝から崩れ落ちてしま
い現在はベンチに座って燃え尽きていた。

中でも井原は一度朝飯をリバーズしたので消耗が激しいのか、ベン
チに寝転がって死人のように青白い顔をしていた。

「お、俺はもうダメだ…………後で必ず合流し、遊園地をマスターしてやる
ぜ…………」

そう言い残し、井原はそのまま寝息を立て始める。余程体力を消耗
したのか死ぬ程疲れてるみたいだ、しばらくそっとしておこう。

「しかし、遊園地…………とんでもないな…………」

世の中の連中はこんな事して遊んでいるのか。素直に尊敬する。
俺はもうやりたくない。

…………だが、遊びはまだ始まったばかりだしそもそもチケットはタダ
で中では遊び放題である。楽しまなければ勿体ないので、遊ぶしかな
い。でもしばらく休みたい。

「なあ王子……なんか、もうちよい緩い遊びないのか……」
「……とりあえず、ちよつと歩いて気晴らししよう……うう、まだ世界が回るよう……」

かくして、井原をベンチに置き、俺達二人で遊園地を見て回る事になったのだった。

11話

「はー、だいぶマシになった……」

「僕はまだ足元が覚束無いよ……」

あれから適当に歩きながら遊園地の中を見て回ってる俺達は、やっときっきのダメージから解放されつつあった。

楽しかったけど次乗るなら一回だけ乗るとかにしたい。

「んで、次はどうすんだよ王子。今の俺に男の遊園地遊びは耐えれそうにないから王子の遊び方を教えてくれ」

「そ、そうだね。僕も耐えれそうにないと思うからね」

何故かあさつての方向を見ながら言う王子に疑問を感じながらも、俺は王子について行く事にする。

しかし井原が早々にダウンするとは……恐るべし遊園地。

というかよく考えたら王子と二人行動か……まあいいか。女は嫌いだ、これから王子と行動を共にすることが多くなるだろうし今のうちに慣れるようにしておこう。慣れたくないけど。

「そうだなあ……まず、このパンフレットを見ながらどこに行くか決めないかい？」

『GARDEN LAND』と、この遊園地の名前が描かれたカラフルな紙を取り出して見せてくる王子。

そーいや最初からパンフレット持っていたな。

しかも地図にもなっているようだ、これを見ながらどこに行くか考えるのはありだろう。

「ほー、どんなのあるんだ」

横から王子が持っているパンフレットを覗き込む。さて、なにがあるのか。

「そうだなあ……じゃあ、フォレストラビリスなんてどうかな。森の中を船で見て回るアトラクションなんだけど、実は日によって進む方角と森の様子が変わってたりするから何度来ても楽しめるんだ」

「へえ、そりゃ凄いな。金かかってそう」

「実際、かなり力を入れてるって言ってたからねえ……と、ここからだ

と歩いてすぐだね。それじゃあ行こうか」

そんなわけで、王子の後ろに付いて俺は歩く。

その時、どこからか視線を感じる事に気がつく。

なんだ？　と思いい周りをしてみると、周りの女共が熱に浮かされたような表情で王子を見ていた。

……そういや、コイツ王子と呼ばれるレベルに顔整ってんだからこうなるわな。

その反面、王子と話しながら歩いている俺に対して不思議そうな表情や、小馬鹿にしたような表情で見てくるクソアマ共も居る。

……まあ、俺は前髪で顔を隠しているし、見てくれは完璧な王子と共に歩いているからそんな表情を向けられるのはわかる。

だがしかし、それはそれとして小馬鹿にしたような目線ムカつく。俺みたいなのが王子と行動を共するのがアイツらには余程滑稽に映っているのだろうか？　やはり女はクソである。

これは男にも女にも言える事だが、格下を見て嘲笑うのは品性と性根と捻くれ曲がつた性格ブスだから轢かれて死ぬべきだろう。

「王子、お前はまだマシだからよかったよ」

「……えっ、いきなり褒められてもなにもできないよ？　……と、着いたよ。ここが『フォレストラビリンス』さ」

キョトンとした王子が指さす先を見ると、そこには広がるのは港みたいな場所で、一隻のこじんまりした船がそこにある。

幸い、人は並んでいないので直ぐに乗れそうではある。

「しかし、フォレストって感じしないな」

「まあ、ここは船乗り場って感じだからね。船で水の上を進んだ先には大きな森が広がっているよ」

そんな会話を交わし、俺と王子はそのまま船に乗り込む。

乗ってる客は俺と王子だけか……なんて考えていると、徐々に人が駆け込んで来てあつという間に満員となった。

案外人気なんだな……と思った所で、客の顔を見て俺はウゲツとなる。

……さつき王子に向かって熱視線送ってた連中何人かいるじゃ

ねえか。

「おい王子」

「ああ、うん、気づいてるよ……」

本人も気がついたのか、げんなりした顔を浮かべている王子。

だが、向こうは見ていてるだけで関わってくる様子はないので放置でいいだろう。

「なんつか、お前も大変だな」

「ははは……そう思うならもう少し優しくしてくれてもいいんだよ？」

「やだね」

「手厳しい」

なんて軽口を叩きあっていると、アトラクションが動き出す。

水を裂き、突き進む船体。その水の向こうにはなにがあるのか――

「めっちゃくちゃ面白かったな」

「そうだろう!? ふふん、一番のオススメだからね……井原君がいなのは残念だけど」

いやとても楽しかった。森の奥に進めばそこから先で巻き起こるのは銃撃戦。

森の奥に逃げ込んだマファイア崩れのチンピラが、追ってきたマジモノのマファイアを迎え撃つというストーリー。

森を利用した銃撃戦に、最後は地形を利用して船で飛び、相手の船を飛び越えるという演出には心が震えた。悔りがたしフォレストラピリンス。

「さつきも言った通り、日によってルートが違ってくるからストー

りーも違ってきてとても楽しいんだよこのアトラクションは、だからまた別の日とかに来るのもオススメだよ」

「へー……遊園地すげえな」

「ふふっ、楽しんで貰えたなら何よりだよー」

そう言つて胸を張る王子を見てサラシが外れたらやべえなあと思っていると、

「……あっ」

そんな声を漏らし、慌て胸を押さえる王子。

……おい、ベタ過ぎるだろ、おい……

「……あ、天城君？ 少し背中に張り付いてもいいかな……？」

「お前もつとちやんと巻けよ……」

「ま、巻いてるよお……でも育ち盛りで……」

「育つな、削ぎ落とせ」

「グロいよ!?!」

そう言つて、胸を押さえつつ俺の背中に張り付く王子。傍から見たらなんか凄い絵面である。

「……んで、どうすんだよ。どつかトイレとかないのか？」

「……この辺り、トイレないんだよね……でも、あっちの方に建物と建物の間にできた隙間があるんだ。そこなら天城君が外で見張つててくれたら誰も来れないから大丈夫……」

「……外で巻き直すのかよ」

(背に腹は変えられないんだよ!!)

小声で叫ぶという器用な事をやってのける王子に多少感心しつつ、俺は王子が指し示す方向に向かって進む。

背中に張り付いた王子のせいで歩きにくく、どうしても動きが遅くなる。そして周りから不審な表情を向けられる。

そりやそうだ、俺でもこんなふう歩いてる二人組を見たらそんな表情で見る。

「その……もう少し早く歩けないかい……？」

「無茶言うな、これが限界だ」

「……胸が天城君の背中に当たつて恥ずかしいんだけど……」

言われてみると、背中になにか柔らかい感触を感じることに気がつく。

なるほど、胸が当たってるのか。ふむ……………

「なんか背中に物が当たる感覚キモイな……………おい、それなんとか引っ込めろ。腹の肉みたいに気合いで平らにできないのか」

「いろいろ酷くないかい!? というか、普通はこういうの嬉しいとかそんなんじゃない……………」

「この前のおっぱいとチンチンの話を掘り返すか?」

「嫌だ」

……………やべえ鳥肌が立ってきた。

できる限り早足で進み、建物の隙間に向かう。

進む足、揺れる王子の胸が俺の背中に当たり鳥肌が立つ。なんて事を繰り返しながらなんとか建物の隙間の前までたどり着く。

そこは、一人がギリギリ通れそうな小さな隙間だ。隙間の向こうにはちよつとしたスペースが広がっており、あの中ならサラシを巻き直すことが可能だろう。

「よし、はよ巻き直して来い。ぜってえ死んでも見ないからはよ行け」
「なんだろう、天城君が言うど安心出来るセリフなんだけど、同時にとても釈然としないなにかが……………い、いや、とにかくありがとう。それじゃあ早速……………」

「ねえ、さつきからどうしたの? 体調でも悪いの?」

王子が隙間に入ろうとした瞬間、後ろから声が掛けられる。

タイミング悪っ! なんて思いながら振り返ると、そこに居たのはアトラクションに乗る前辺りから王子に熱視線を送っていた女だ。

もしかして、さつきからつけていたのだろうか? 王子に話しかけるタイミングを伺っていたとか。

まあなんにしても、凄まじいぐらいにタイミングが悪い。

「いえ、大丈夫です。ご心配いただきありがとうございますどうぞございます美しいお嬢さん……………あなたという一輪の花を見てみると、気分も安らぐ物……………」

さつきまでの焦った様子はどこへやら、キメ顔を作り俺の後ろでな

にやら鳥肌が立つようなセリフを吐く王子から咄嗟に離れそうになるが、王子が思いつきり俺の服を掴んでいて離れられない。この野郎め。というかなんだこの歯が浮く所か歯が抜けそうなセリフは。

「う、麗しいお嬢さんなんて……」

そんな歯が抜けるセリフによって顔を赤らめる女を見て、王子が王子と呼ばれる由縁を再認識していると、女が俺を押し退けて王子に近付こうとする。

「あのさ、俺ら用事あるから向こう行って欲しいんだけど」

「はあ？ あなたみたいなのどうでもいいから。私はその人と話したいの。退いて」

俺は、きわめて、冷静に、普通に言ったつもりであるが、女はどうでもいいといった様子で吐き捨てる。

……なるほど、なるほど、そう言う態度で来る訳か、そうか。

「俺とコイツが遊んでる事がわかんねえのか？ その目ん玉は飾りか？ ビー玉か？ つか俺の方がテメエなんざどうでもいいわ。なに俺がテメエに興味あるみたいな感じの事ほざいてんだよ。GARDEN LANDだけに頭がお花畑ってか？」

「はあ!? なによ！ いきなり失礼な奴ね!!」

「失礼なのはお前の態度と存在だよ。つか王子に話しかけに来たのって心配以前に単に王子に近づきたかっただけだろ？ ずっと王子見てたもん。ストーカーかよ、きめえな」

「あ、あんた——!!」

「天城君ストップ!! 落ち着いて!」

更なる罵倒が飛び出しそうになった所で王子に口を抑えられ、声が喉へ引っ込んでしまう。

「その、お嬢さん。心配してくれたのは嬉しい。でも彼は、口は悪いけど僕の大事な親友なんだ。だから、彼を軽く見るような発言はやめて欲しい。僕にとっては『なんか』じゃなくて『大事な』だからさ」

「うっ……」

王子のその指摘に女はバツが悪そうに顔を歪めると、そのまま走り去ってしまう。

もう一言ぐらい文句を言ってやりたかったが王子がしつかりと口を押さえていたせいで何も言えなかった。おのれ。

「……………よし、行ったね」

「ちっ、都合が悪くなったら逃げやがって。これだから女は」

「いや、天城君も悪いからね？ 彼女も悪いけど全力で煽り返した天城君にも非があるよ？」

王子は非難するような目線を向けてくるが、すぐさま表情を切り替える。その顔に映るのは疑問を浮かべているような表情。

「…………でも、助かった事は助かったよ。ありがとう…………それにしても、本当に根っからの女性嫌いっぽいね…………いや、単純に口が悪いのもあったり…………？」

「感謝するか貶すかのどっちかにしろよ」

そんな俺の言葉を無視したのか聞こえなかったのか、王子は透かし考える素振りを見せた後、口を開く。

「…………よかったら、どうしてそんなに女性が嫌いか教えてくれないかなー…………なんて」

「……………」

まあ、こんだけ女嫌いを見せたら気になるのだろう。

だがしかし、俺は答える気はないしなにより答えたくない。だから、適当に誤魔化す。

「んな事より、サラシ巻き直さなくていいのか？」

「……………あつ」

俺の指摘を受け、王子は慌てて隙間に入っていく。

俺はそれを見届けると隙間に背を向ける。元より、覗く気なんてサラサラない。

俺の女嫌い。人によってたいした理由ではないと笑うのだろう。

だが、やっぱり俺は女が嫌いだ。相容れないというか、生理的に無理というヤツだ。

そんな事実を再確認しながら、俺は王子を待つのであった。

12話

「やあ、待たせたね……………見ていないよね？」

「見てねえよ。命かけてもいい」

「……………なんというか、女嫌いを通り越してホモだったりするんじゃない？」

「なんでそうなんだよ。じゃあガン見してりやよかったのか？」

「天城君は極端過ぎない!? こう、0か100しかないの!？」

元々見る気もないし、死んでも見ないと言った俺は持つてきていたミルクの飴を舐めながら待つていたのに何故こうも王子は騒がしいのだろうか。理不尽だ。

「まあ、さっさと次行くぞ。他にはどんなのがあるんだ？」

「なんか釈然としないな……………いや、まあ、それが天城君と井原君か」

「俺と井原を同じカテゴライズにするのやめてくんない？」

そんな俺のツツコミを無視し、王子はパンフレットを開いたと思うと、ポケットからスマホを取り出す。

と、同時に俺のポケットの中にあるスマホがブルブルと震える。

誰かからなにか届いたのだろうか、俺もポケットからスマホを取り出すと、俺、井原、王子の三人で連絡用に作ったグループチャットに新しいメッセージが届いていた。差出人の名は『井原』

さて、内容は……………

『俺は、全てを見下す……………この何処よりも高い場所から、街を、お前らを……………な』

そんな意味のわからない文章と共に、高所からこの遊園地を撮った画像が送られて来ていた。

「……………あ、なるほど。井原君は今、観覧車に乗ってるのか」

納得がいったように王子が呟き、そのまま視線を宙に向ける。

つられて俺も視線を向けると、ここから離れてはいるが、ここからでも大きく見える観覧車があった。

「つてか、いつの間に井原復活してんだ」

体調治った。というメッセージもなくいきなりこれである。

……………やはりあれか、バカと煙は高い所が好きと言うし、観覧車を見

つけた井原はそのまま乗り込んだのだろうか。

「やつぱり、井原君高い所好きなのかなあ……？」

「お前今、井原がバカだから高い所が好きと思ったな。なんて失礼な奴だ」

「うっ……ご、ごめんなさい。流石に失礼だったね。気をつけるよ……反省」

「……いや別に反省まではしなくていいぞ」

冗談に対して本気で反省した様子の王子に少しだけ罪悪感が湧く。逆に俺がごめんなさいで反省である。

「とりあえず井原の体調戻ったみたいだし、このまま合流するか。こっからだと観覧車までどう行くんだ？」

「ええと……あそこのショップピングエリア抜けたらすぐだね」

王子に言われた所に目を向けると、そこはお土産になりそうな物を置いてあるショップが乱立しているエリアが目に入る。

そう言えば、一応冬華にお土産でも買って行ってやるか。買わなかったらうるさいだろうし。

「よし、そんじやあ行くか」

「うん、行こう」

井原に『今からそこに向かうから待ってるよ』とメッセージを送り、俺達はショップピングエリアに足を向ける。

ショップピングエリアは、GARDEN LANDという名前に関係があるのか自然の物が多く感じる。

例えば、なんか海外映画の金持ちの家とかに出てくる植物で出来た壁……生け垣って言うのやら、なんか植物で出来た人みたいなオブジェがある。

そして、お土産売り場などの店は木製でなんかこう雰囲気がある。

「なんつか、本当に金がかかってるな。見ろよ王子、あの店とか壁に蔦が張り付いてる。甲子園球場みたいだな」

「……なんだろう、もっとこうファンタジーなイメージがあったんだけど一気に脳内で球児の白熱した戦いのイメージに塗り替えられたよ……ちなみには緑のカーテンと言って、暑さを和らげる効果が

あるんだよ」

「マジか。今まで無駄なもんだと思ってた」

「まあ知らないと思うかもしれないね……………あれ？」

そんなややタメになる話を聞きながら俺と王子が足を進めていると、いきなり王子が立ち止まる。

「どうした、王子」

「ん、いや、あの子……………」

立ち止まった王子の視線の先には、そこはガラス越しに服を展示している店……………の前で、一人の幼い女の子が目には涙を浮かべて立ち尽くしていた。

「……………迷子か？」

「ごめんね、ちよつと行ってくるよ」

俺の言葉も待たず、王子はそのまま女の子に向かって走り出す。

俺も迷子の子供を置いて行くのは寝覚めが悪いし人としてどうかと思うのでそのまま王子の後に続く事にする。

「うっ……………うう……………おかーさん……………どこ行つたの……………」

「……………やあ、そこのかわいらしいお姫様。君に涙は似合わないよ」

「……………えっ？」

「ほら、これで涙を拭きなさい。大丈夫——僕が来た」

女の子に向けていきなりの王子モード全開である。

正直なにやっつてんだと頭を叩きたくなる衝動に駆られたが、子供の前なので抑える。

まあ、幼い子供とは言え女の子。困っている所にこんなイケメンが王子様ムーブかませば涙を引つ込め——

「……………」

る所か、ポケットから防犯ブザーを取り出した。

どうやらお母さんの教育がしっかりし過ぎていたのか、彼女にとつて王子は『助けに来た王子様』ではなく『いきなりわけわからんこと言ってきた不審者』という認識のようだ。

「え、ええ!? ち、違うよ。僕は怪しくないよ。僕はそう、周りに王子と呼ばれているぐらいに王子っぽい通りすがりだよ!」

「……………」

「だ、だから、それを仕舞ってから話そう……ね？　大丈夫、大丈夫だから——」

「どっから見ても不審者じゃねえか」

「いたい！」

見かねた俺はつい王子の頭に軽くチョップを入れ、王子が持つてるパンフレットを掠め取りながらその場に割り込む。

突然現れた俺に子供はまた不審者が現れたみたいな目を向けてくる。

まあ俺の顔は髪で隠れてるし、王子の仲間と思ってるみたいだから仕方ないだろう。

俺はしゃがみ、女の子と目線を合わせて、昔を思い出しながら、できただけ優しい声で話しかける。

「ごめんな。このお兄さんちよっとおかしな人なんだ」

「……………おかしい人には会ったらこれを使いなさいって」

「うん、その通りだよ。偉いね……でもコイツは悪い奴じゃないからそれはやめてあげて欲しいな」

「……………ほんとー?」

「本当本当。俺達はおかしい人じゃないよ。その証拠に、お母さんに会える所を教えてあげるよ」

「ほんとー!?!」

「本当！　ほら、あの道を真っ直ぐ行くとお母さんを探してくれる建物があるんだ」

そう言つて、俺は王子からかすめ取ったパンフレットの地図を見て、『迷子センター』の場所を確認しながら子供に語りかける。

「迷子になったらいけないし、俺達も一緒に付いて行っていいかな?」

「ねねか迷子じゃないもん！　ねねかが王子さまのおようぶくをみてたら、おかーさんがいなくなったの！　おかーさんが迷子だもん！」

「そっか、ねねかちゃんも迷子のお母さん探してるのか、偉いね……それじゃあ早くお母さんを見つけないとね。実はお兄さん達も迷子の友達、井原君を探してるんだ。一緒に付いて行ってもいいかな?」

「いいよー！ 早くおにーさんの友達も見つけてあげないと！」

「ねねかちゃんは優しいなあ……よし、じゃあ行こー！」

「こー！」

ねねかちゃんとパーフェクトコミュニケーションを決め、王子の方を振り向き行くぞとジエスチャーを送るが、王子は唾然とした表情で俺を見ていた。

もう一度、行くぞ！ とジエスチャーを送ると王子はハツとした表情を浮かべて俺達に付いて来る。

そのまま迷子センターまで向かうと、迷子センターの前でどこことなくねねかちゃんに似ている女性の姿を発見する。

「ママー!!」

「音々花!!」

案の定、音々花ちゃんのお母さんである。

音々花ちゃんのお母さんは俺達にお礼を言うと、そのまま音々花ちゃんの手を引いて何度も頭を下げながら立ち去って行く。

「おにーさん！ おねーさん！ ありがとうー！」

最後に笑顔でお礼を言って立ち去って行く音々花ちゃんを見送り、良い事したなあ……と思っていると、王子に肩を叩かれる。

「ん、なんだよ」

「……天城君、君は二重人格かい？」

「は??」

「いや、だって、普段と調子が全く違うじゃないか！ あんな優しいげな声とか出せるの!?!」

「人をなんだと思っただよオイ……子供相手ならそれなりに優しいぞ俺は」

「……ロリコ」

「妹がいんだよ!! 昔の妹は俺にベツタリだったからそれで扱いか慣れてるだけだ!! お前こそ0か100しかねえじゃねえか!!」

「いや、普段とのギャップが凄くてつい……まあ、なるほど。天城君はお兄ちゃんだったのか……」

と、どこか納得がいったかのように呟く王子。正直どこが納得いつ

たか俺は理解できない。

「むう、それにしてもなんで天城君には懐いて僕には防犯ブザーを取り出したんだろう……お兄ちゃんみたいに上手くやったつもりなんだけどなあ……」

「……まあ、音々花ちゃん気づいてたみたいだし、音々花ちゃんからしたらおかしな人にしか見えなかったんだろうな」

「え？ なにに？」

「子供は案外鋭いんだよ」

横で頭を捻る、男の格好をしたおかしなおねーさんを引き連れ、俺は井原の元に向かう事にした。

「しゃあ！ 遊んだ遊んだ！ 男同士でも案外おもしれえな遊園地」

「最初のジェットコースターはクソだったけどな」

「な、慣れたら楽しいかもしれない……よ？」

その後、井原と合流した俺達は色々遊び倒し、気付けば空が茜色になっていた。

そろそろ日が短くなってきたので、暗くなる前に帰るのが得策だろう。

俺達は最後にショッピングエリアで土産を物色する事にした。

「見ろよ天城!! ジャスミン草まんじゅうだつてよ！ 罰ゲームに使えるぞー！」

「なんで罰ゲームなんだよジャスミン草まんじゅう」

「え？ だつてジャスミンって基本的に便所の芳香剤の匂いだろ。俺ジャスミン茶とか便所が頭によぎってマジで飲めねえんだよ」

「……………なんかそう言われるとジャスミン俺も無理かも」

「だろ!? よし、罰ゲーム用に買ってくるわ！」

井原のせいでジャスミンに対する苦手意識を抱いていると、ふと王

子が居ない事に気がつく。

どこに行ったんだ？　と思つて周りを見るとすぐに王子の姿を見つけた。

さつき、音々花ちゃんが泣いていた場所。服を展示しているショツプの前で王子はガラス越しに服を見つめていた。

土産を物色している井原から離れ、俺は王子の元へ行き声をかける。

「何見てんだ？　服でも買うのか？」

「……いや、少し見ていただけさ」

少し、憧れらしき物が混ざつた表情の王子が見ていた物は、なんというまさに『王子様』という表現が似合う服だった。

白いタキシードみたいな服で、顔がいい奴が着ればそれこそ本当に王子様になれるのだろう。

ちなみにお値段は税込19998円である。どことなくお得な感じはあるが結局は高い。

「ふーん、お前に似合いそうだな、その服」

「それは……褒め言葉だね。ありがとう」

嬉しいとも、複雑とも言える表情で答える王子に少し違和感を覚える。

なんだろう、少しだけ気になる。

「その服、なんか思う所でもあるのか？　なんかこう、今のお前微妙な感じだぞ」

「微妙つて……いや、なんでもないよ。……あー、いや、そうだね。天城君にはこう言つた方がいいかな……」

天城君には関係ない事だから気にしないで」

王子の口から出たのは、明確な拒絶と取れる言葉。

笑みを浮かべてはいるが、立ち入つて欲しくない。そんな意思を感じ取れた。

「……ま、そう言うなら聞かねえよ」

「うん、ごめんね」

気にはなるが、俺も女嫌いの理由を言っていないしこれ以上突っ込

める立場でもない。それに突っ込むほど深い仲でもないので会話はここで打ち切る。

数秒の沈黙。なんとも言えない空気が流れるが、それを破るかのようには王子は口を開く。

「今日はありがとう。今日は久しぶりにすごく楽しかったよ、本当にありがとう」

「ちよつと遊んだぐらいで大袈裟な奴だな……」

「大袈裟なんかじゃないよ。今日の事は、私にとっては大事な思い出……だから、本当にありがとう」

「……どういたしまして」

いつになく、真面目な様子の王子に少し居心地が悪くなる。

俺は月2万の雇われの身である。だから、こうして感謝されるとなるとも言えない気持ちになる。

「まあ、仲良し計画もあるし、また遊んでもいいぞ、井原とかも呼んでや」

「うん、いいね……また予定を立てて、どこか行こうか!」

そう言つて、どこか女性的な柔らかい笑みを浮かべる王子。

……………

「おーい! 俺置いてどこ行つてんだよお前ら!」

「こちらに近づいてくる井原の声に、俺は、正気に戻る。

「つと、ごめんよちよつと天城君と話があつてね。ねえ?」

「ん、あ、いや、そうだな」

「なんだよ、俺だけ仲間外れかよ……」

「違う違う。最後にプリクラでも撮らないかって話をしてたんだ。ほら、井原にプリクラの使い方教えようかね。女の子はプリクラ好きだし」

「マジかよ!!! 流石だな王子!! 心のベストマイフレンズ!」

「じゃあ、最後はプリクラでいいかな」

「あつたりまえだろうが!! ほら、行こうぜ天城!! なにボケつとしてんだ!」

「なんもねえよ。で、プリクラね。了解」

何故か、最後は近くにあったプリクラマシンでプリクラを撮る事になっていた。

「おい井原もうちよい離れる暑苦しい」

「無茶言うなつての！ 中狭いからしやーねえだろ！」

「というか二人共もつと真ん中に寄つて！ それじゃあ写らないよ！」

そんなやり取りの後、一枚のプリクラが出来上がる。

相変わらず、髪で顔の目元が隠れている俺に、キメ顔を作るつもりが半目になってしまった井原。そして――

「クソっ!! 王子だけめちやくちや写真写りいいじゃねえか！ もつかいやんぞもつかい！」

「あはは！ いや井原もこれ中々いい写真写りだよ！ 最高!!」

「マジで!?! 女の間じゃ半目がトレンドイだったのか!?!」

さつきと同じで、女性的な、柔らかな笑みを浮かべている王子。

………不覚にも、少しかわいいと思ったのはおそらく俺の気の迷いなのだろう。きつと。

12. 5話と13話

『天城家、夜の語り合い』

「兄貴ガーランドに行ったの!？」

「そうだぞ、その土産が証拠だ」

「むむむ……いいなあ。私も行きたかった……まあいいや、お土産ありがとうね、兄貴」

「おう、ありがたく食べよ」

帰宅後、居間でゲームをしていた冬華にGARDEN LANDで買ったクツキーとかの土産を渡すと、大層驚いた表情を見せてきた。

「というかガーランドって略すのか。」

「てか、ガーランドって有名なのか?」

「兄貴ごんだけ無知なのさ、この辺りじゃかなり有名だよ。むしろなんで知らないのか驚いてる」

「遊園地なんて行かねえし仕方ないだろ」

俺の答えに釈然としない様子だが、知らんもんは知らんのだ。

「まあ、いいか。それより兄貴、井原さんと女の人と遊んだ感想は?」

「だから違うと言つとろーが」

「えー? でもそれじゃあ、朝に聞いた時の兄貴の間はなんだつたの?」

「寝起きで頭回ってなかっただけ」

「ええ〜?」

「しつこいな……証拠を見せてやるよ、ほら」

「ん? これって……プリクラ? 兄貴と井原さんと……あれ、誰この人? めつちや美形じゃん」

帰りに三人で撮ったプリクラを見せると、プリクラに写る王子を見て冬華は驚いた様子を見せる。

まあ、実際は女なんだけどな。

「最近知り合いになった奴。これでわかつただろ? 俺は女と遊園地とか行つてない」

「ちえー、女の人だと思ったのになあ……でもこの人、中性的な感じに見える……」

と、面白くなさげにプリクラを見る冬華だが、その顔になにやら疑問の色が映る。

「んー、あれ？ この人、なんか見覚えあるような……」

「見覚え？ ……街中で見かけたか？ 一度見たら忘れようがないぐらいの顔はしてるし」

「いやそんなんじゃないよ……なんか学校で昔見た事あるよー……むう、喉に魚の小骨が刺さった感じ」

「というか、そもそもお前女子校だろ。女子校で見た事あるはずない」「それもそうだねー」

そんなとりとめのない会話をしながら、夜は更けていくのであった。

「やあ、おはよう天城君に井原、二人共今日も早いね」

「おはよ、王子も相変わらず早いな」

「よっ、おはよーさん、俺の得意技は早寝早起き30分前行動だからな」

「……井原って結構健康的というか、模範生みたいな生活リズムだよな」

「知らねえのか園崎、寝る子は育ち盛りってな」

「井原、それを言うなら寝る子は育つだろ」

「こまっけえこたあいんだよ！」

「……僕も井原みたいに細かい事には動じないようにした方がいいかな？」

「やめてくれ。今の井原と王子の組み合わせですら胃もたれおこしてるんだ、これ以上ポンコツになってくれるな」

「待つてくれ天城君。それ暗に今の僕もポンコツだと言っていないか
い？」

「察しろ」

あの遊園地に遊びに行った日から2週間程。

相も変わらず仲良し計画は継続しているわけなのだが、最初の頃と
比べて周りにかんりの変化が見られている。

まず代表的な変化と言うと、

「王子、すっかり変わっちゃったね……」

「前はあんなんじゃなかったのに……」

「今までのイメージが……」

王子を取り巻いていた女共の数がかなり少なくなった事だ。

なんでも、今の王子は前とは違い過ぎてイメージがあーだこーだとの
事。

まあこのぐらいで王子にショックを受けてる奴は雑魚なのでどう
でもいい。というか普段の王子みたらショック死するんじゃないかなろ
うか？ どうでもいいけど。

まあ、かなり少なくなっただが、完全に居なくなっただけではない。
例えばそうだな……

「おはよう、園崎君……今日も楽しそうね」

たった今、王子に向かって笑顔で話しかけてきた女、姫宮梨花と
かである。

「やあ姫宮さん。今日も名前の通り、花のように麗しいね……」

「ふふつ、園崎君は相変わらず王子様ね。それと比べて……」

と、姫宮は王子に向けていた笑顔から180度一転し、俺と井原に
対してゴミでも見るような目を向けてきやがった。

「井原、アンタはもう少し知識……いえ、知性を身につけなさい」

「地式……地勢……？ そんなもんに興味ねえぞ」

「知らないわよ。とにかく王子の友達ならもう少しちゃんとしなさい
い」

「マジかよ……王子の友達にいるには地球を学ばなきゃいけないのか
よ……」

「天城は……全部がダメ。ダメね、生まれ直して来なさい」

「どうやって生まれ直せってんだよおい」

「輪廻転生よ」

「へえ、じゃあ先に転生する所見せてくれよ。俺から見たらお前も全てがダメダメで出直せって感じだしな」

「は?」

「あ?」

「……ふ、二人共、朝から元気だね……」

「いや園崎、これ元気じゃなくて短気だろ」

姫宮梨々花。コイツだけは相も変わらず王子に近づいてきている。

そして俺と井原には敵意をぶつけてきている。いや、井原に対してはなんとというか呆れもあるだろうが、俺に対してはぶつちぎりの敵意である。

それではここ二週間の俺と姫宮の会話を思い返していこう。

二週間前。

「天城、アンタ王子の友達になったのならその前髪切りなさいよ。見てて鬱陶しいし不快よ」

「ああ? 俺の髪型なんざ関係ないだろうが、それにお前に不快と思われた所で路頭の石ころ並にどーでもいいわ」

「はあ? 世間一般的にその髪は不快でキモイわよ、それがわからないの?」

「は? 一般論語るならまずその態度で改めてこいや」

「は?」

「あ?」

一週間前。

「天城アンタねえ! もう少し王子の友達という事の自覚を持ちなさいよー!」

別に私はアンタが王子の友達だなんて認めていないけど」

「自覚じゃなきや友達やってちやダメとか暴論だな。お前絶対友達とかにランク付けるタイプだよな」

「アンタほんと失礼ね!？」

「その言葉そのまま返すわ」

三日前。

「天城アンタ……王子の友達ならもつとフォローというか……大事に
しなさい」

「あ、それは僕も同感だね。天城君はもつとデレた方がいい」

「……じゃあ聞くが、事前に、なんの、連絡も相談もなく、いきなりパ
ンクロッカーみたいなのファッションで登校してきたポンコツをどう
すればいいんだ？　なあ？　姫宮お前ならどうするんだ？」

「……………ごめん」

「わかればいい」

「あれ、二人が仲良く頭を抱えてる……？」

昨日。

「天城！　そのお菓子……きのこじゃない!?　たけのこでしよう普通
は!？」

「あ？　お前たけのこ派かよ。たけのこ派はチョコの部分手掴みで
食つとけよ。手を汚す菓子なんざ菓子としての本質見失ってるんだ
よ」

「は？　きのこ派はその美味しくないビスケットを貪り食べておきな
さいよ。手が汚れるなら拭くなり箸を使うなりすればいいじゃない。
お菓子の食べ方がわかっていない人間にはお似合いね、そのきのこ
は」

「は?？」

「あ?？」

「落ち着け天城！　姫宮！　パイ○実が!1番うめえんだよ!!」

『お前（アンタ）は引っ込んでろ（て）!!!』

（この喧嘩、私全く関係ないね……まあ私はト○ポ派なんだけど）

まあ、そんな感じで顔を会わせれば敵意を向けてくるから俺も敵意で返すわけで、姫宮との仲は最悪といえる。まあ最悪上等なだけだな。

「まあ天城はどうでもいいわ。それより園崎君、噂は聞いてる？」

「噂？ なにかあったのかい？」

「ええ、実は転校生が来るんだって」

「転校生、かい？ それは珍しいね」

「マジか!? 男か!? 女か!？」

「井原うるさい。男らしいからとつと座って落ち着きなさい」

横でその話が聞こえてきた俺も、その話題に少し興味がわく。

転校生か、男なのはありがたい。

横で崩れ落ちている井原を尻目に、どんな転校生が来るのか思いを馳せる。

どうせなら王子以上のイケメンが転校してきてそのまま姫宮がそっちに流れてくれれば万々歳なのだが。

「おーい、お前ら席に座れ……よし、今日の園崎の格好は正常だな。今日はいいい日だ」

「せんせー、園崎君の格好でその日の気分を決めないでください」

授業開始の時間となり、先生が入ってきて席に座るのを催してくる。

立っていた連中が席に座り静かになると、そのまま先生が話し出す。

「さて、そんないい日に朗報だ。耳聰い奴はもう知ってるだろうが、うちのクラスに転校生がやってきた」

「せんせー、女子ですか？」

「見りやわかる。おい、千堂（せんどう）。入ってこい」

「はい」

先生の言葉と共に、扉が開き一人の男が入ってくる。

黒曜石のような黒髪、眼鏡越しに映る切れ長な目からは冷たげな印象を受ける。

だが、その冷たげな印象を覆す程に、千堂とやらの顔は整っていた。園崎とは顔の作りが違うが、それこそ王子と呼ばれてもなんの遜色もない、そんなイケメンだ。

「すごいイケメン……」

「クールね……クール系だわ……」

「新たな王子……?」

そんな、色めき立つ女共に吹き出しそうになるがそれを堪える。コイツら顔がよけりやなんでもいいんだな。

「千堂、自己紹介を頼む」

「はい……俺は千堂修司。家の都合でかの学園に転入してきた。今日からよろしく頼むよ」

「だ、そうだ。お前から仲良くやれよ……さて、千堂の席だが……あそこの園崎の後ろが空いてるな。そこに座ってくれ」

「……………園崎?」

千堂は園崎という名前に反応を見せ、先生が指さす先に目を向ける。

そして、物珍しそうにしている園崎を見た千堂は目を見開き、ひどく驚いたような表情を浮かべる。

「お前……っ！　なんでこんな所に!？」

そして、まるで会ってはならない者に出会ったような反応を見せ、王子を指さした。

知り合いなのか？　なんて思いながら王子に目を向けると――

「えっ、誰?」

本当に誰だかわかっていない様子の王子に、燃え尽きてる井原を除きクラス全員がずっ転けそうになったのだった。

14話

「クソっ……やっぱり世の中顔だけ天城イ……すげえ人気だけあの転校生」

「そうだな」

「んだよその興味無さそうな感じ!? 俺は許さねえ! 全てが顔で評価されるこの世界を!」

「お前の場合顔以外が評価されてないんだよ」

「ひでえな!」

休み時間、灰になっていた井原がいつの間にか復活し、転校生を遠目に見ながらこの世の不条理さを嘆いていた。

井原につられ、俺も転校生の方に目を向ける。

「千堂君、どこから来たの?」

「かっこいい……その、彼女とかいる?」

「本当、王子様みたい……」

王子から鞍替えして転校生を囲む女子共を見て、失笑が浮かぶ。

というか王子様って、本当に鞍替え早いな女共は。

そして女に囲まれている転校生はというと、満更でもない笑みを浮かべつつ女子共の相手をしている。

ふと転校生と目が合うと、転校生はギャーギャー騒いでいる井原を見て、小馬鹿にするような笑みを一瞬浮かべやがった。

「なんだあの野郎。俺の顔がそんなに面白いのか」

「面白いのは自分の立場なんだろうな」

第一印象はクールな感じだったが、今の印象はどこか人を小馬鹿にしてる奴。

正直に言うところか、姫宮並に気に食わないし、なにやら嫌な物を感じる。

まあそんな転校生はどうでもいいからほっておくとして、俺はさっきから隣で考え込んでる奴に話しかける。

「で、王子。アレお前の知り合い?」

「……た、たぶん」

「いやたぶんってなんだよ」

そんな曖昧な返答をする王子に転けそうになる。

そう、あの転校生は王子を知っている様子だったが、当の王子はコレである。

王子が知らないフリでもしてるのかと思っただがよく考えたらコイツはポンコツなのでそんな芸当は出来ないだろう。なぜなら今まで女とバレてないのが不思議な程に頭がパーに近いのだから。

「たぶん……知り合いなんだと思うんだけど……うーん」

「まあ思い出せないって事はどうでもいい奴なんじゃねえの?」

「そーだそーだ! あんな奴はほつといて俺らで遊ぶぞ園崎に天城い!」

「うーん……」

俺達の声が聞こえているのかいないのか、頭を捻りながら考え込む王子。

そんな王子をどうしたものかと考えていると、姫宮がこちらに近づいて来るのが目に入る。

「園崎君、天城と井原も言ってる通り、気にしない方がいいと思うわ。あんまり関わらない方がいいと思う」

俺達の話聞いていたのか、近づいて来た姫宮は俺達と似たような事を述べた。

コイツと意見が合うことに不気味さを感じるが、それ以上に少し驚きがあったのでそれを口に出してしまう。

「つか、お前は転校生の所に行かねえのかよ。新しいイケメン王子だぞ、取り巻いて行かねえのか?」

そんな俺の言葉に、姫宮は心底呆れた様な表情を作る。

「バカね、私にとって王子は園崎君だけよ。それに……千堂だっけ、アレはなんか、私の勘だけど天城並に気に食わない感じがあるし」

俺が思ってる事と似たような事を吐き捨てる姫宮になんとも言えない気持ちになるが、それはひとまず置いておいてそのまま転校生に目を向ける。

女に囲まれ、どこか気分が良さそうな転校生。

そして視線をさ迷わせている転校生が考え込んでいる園崎を見る
と、

「ふっ」

嘲るような、勝ち誇るかのような笑みを漏らすと視線を外し、また
女共と楽しいげに会話を始める。

……うん、なんかよくわからんがやっぱり姫宮並に気に食わない。
そんな事を再確認した不快感に顔を顰めるのであった。

「よし、昼休みだぞ昼休み！ とつとと飯食おうぜ！」

「おう……王子も考え込むのやめてとつととそこ座れ。はよ食うぞ」

「あー、うん……そうだね」

……二週間の間で三人で飯を食うようになった俺達は席を固め、そ
れぞれ向かい合って座る。

二週間も経てば嫌でも慣れるもので、俺も王子も井原も手際よく席
を固めて自分の弁当を取り出す。

もつとも、王子の心はここに在らずと言った状態だが

「天城も園崎も毎日弁当だよなあ……くっ、俺も手作り弁当がいいぜ
……」

「井原ってそう言えば毎日パンかコンビニ弁当か食堂だよな。親は弁
当作ってくれないのか？」

「かーちゃん、めちやくちや料理下手」

「そんな理由かい」

「そんな理由なんかじゃねえ……飯が不味いのは死活問題なんだよ
……死活問題なんだよ……!!」

珍しく、苦悶に満ちた表情で噛み締めるように言う井原。

どれだけ下手なのか気になるがあまりここはつつかない方が良さ

そうなので黙る事にする。

「天城はいいよなあ、天城も冬華ちゃんも料理うめえから美味しい飯食い放題じゃねーか。俺にそのミートボール寄越せ!」

「俺と冬華も死活問題だったから上手くなつたんだよ。つかそのミートボールは冷凍食品だぞ」

「俺は出来合いの物から逃れらんねえ運命なのかよ!!」 あ、でもうめえや冷凍食品ミートボール」

美味そうに冷凍食品を頬張る井原を横目に、王子の方を見る。

そこには弁当箱を片手に持ち、まだ考え込んでる王子の姿。

そろそろ鬱陶しくなってきたので王子の額にデコピンをかましてやろうかと考えていると、こっちに誰かが近づいてくる気配を感じる。

また姫宮か、なんて考えながら振り返ると、そこには眼鏡に手に当ててクイツとしながら近づいてくる転校生の姿があった。

「よお、園崎。オレの事は思い出したか?」

「あ、えーと……せ、千堂君? その、久しぶり……?」

と、王子にすっかり忘れられているのにめげない転校生がまた王子に話しかけるが、王子の様子を見る限り思い出してはいないだろう。

転校生はそんな王子を見て面白くなさそうな顔をするが、直ぐに笑顔に切りかえる。

「まあいい。それで君達二人は園崎の新しい友達か?」

転校生は俺達二人を値踏みするような目で見て、そんな事を聞いてくる。

「おう、そうだぞ。園崎と俺はエターナルフレンドであり互いのファッションを認めあつた仲だ」

「まあ普通に友達だけど、それが?」

「……ふうん。お似合いじゃないか」

どこか、バカにしたような含みのある言い方にイラツと来る。

なにか言い返してやろうかと思うが、転校生は後ろを向き、そのまま立ち去ろうとする。

「まっ、忘れたならまた仲良くしようや、なあ?」 園崎」

「えつと……そうだね。改めてお願いするよ、千堂君」

いつもの人当たりのいい笑みを浮かべ、手を差し出す園崎。

千堂は園崎の手を掴み、握り返すと――

「……調子に乗るんじゃないぞ」

周りにはほほほ聞こえないぐらいの小さな声で、悪意に充ちた声色で転校生はそんな事を漏らした。

「え……う？」

そんな、マヌケな声を上げる王子と去っていく転校生を見ながら、やっぱりなんか転校生は気に入らんといいながら俺は弁当を掻き込むのであった。

15話

「さて、あの転校生の影響で王子の人気はかなり落ちたわけだが……ぶつちやけ王子的にはどうなんだ？」

「うーん……過ごしやすくもいい事はいんだけど、なんとも言いえない気持ちかな？」

「つかさ、実際の所知り合いなのかあの転校生。ずっと考え込んでるわりには、たぶんとか言って濁すが」

「……いや、なんとかいうか、諸事情で断言が出来ないんだよね。たぶん知り合いなんだと思う……けど、それを確認する術がなくて」

「煮え切らないなあ」

「ごめんね、これも……ちよつとした秘密だから」

バツが悪そうに言う王子を見て、これ以上聞いても無駄だと思い一旦会話を打ち切る事にする。

所変わって現在俺達はパソコン部で向かい合って座っていた。なんとというか、ほぼほぼ溜まり場と化しつつある。

「まあ、ならそこは深くは聞かんが……で、どうするよ」

「どうする、というと？」

「王子のイメージダウン計画、まだ続ける必要はあるのか？」

そう、正直な所ここ二週間で王子の人気はそれなり下がった。そしてそれにトドメを刺すような形でやってきた転校生。

それにより王子を取り巻く女生徒はかなり減ったので、そろそろいいんじゃないか？ というのが俺の考えである。

「ある。確かにマシにはなったけど、ここからどうなるかまだわからないし、念の為にね」

「……まあ、お前がそう言うならまだ続けてもいいが……あんまり長く続いても無駄金払うだけだぞ？」

正直な所、金に目が眩んで王子の頼みを引き受けた所ではあるが、なんというか王子のポンコツ具合を見てみると、金で雇われている事に少しだけ罪悪感がわく。

なので、俺としてはとつとこの関係を断ち切りたいのだが……ど

うした物か。

「そこは大丈夫。お金に余裕はあるからね」

「余裕があったとしても無駄金使っていい理由にはならんだろ。雇われの身で言うのもなんだが、二万あれば美味しいもんとか食い放題だしゲームも色々買えたりするだろ」

「……天城君ってさ、傍若無人な感じもあるけど案外面倒見もいいよね」

「やかましい。単純に金に無頓着なお前が気になっただけだ」

「ありがとう。それに私も無駄金使ってるつもりはないから大丈夫だよ。とても有意義な使い方をしてるつもりだから」

「ふーん……ならいいけど」

そう言つて、見惚れそうな程に穏やかな笑みを浮かべる王子から視線を外す。

……これが有意義な使い方、ねえ。

王子が考える事はわからないが、将来なんかしらの詐欺に騙されそうに感じて少しだけ心配になる。

……いや待て、心配？ 俺が、こいつを？

「おい王子、一つ言っておくが俺がお前を心配してるわけじゃないんだからな。勘違いするなよ」

「なにそのテンプレツンデレ!?!」

女は、嫌いだ。

王子は確かにまだマシな部類ではあるが、やはり女は嫌いだ。

だがしかし、最近王子に絆されている感じがあるのでそろそろ明確に一線を引いた方がいいだろう。

「ツンデレじゃねえ。アレだよ、こうして会話はしてるが俺は女が嫌いだ。そこんとこ忘れるなよって話」

「なるほど……天城君ってなんでそんなに女の人が嫌いなのか？ちよつと気になるかなー……なんて」

「この前遊園地で言われた言葉をそのまま返すわ、お前には関係ない。以上」

「……そう言われちゃうと、これ以上突っ込めないねえ」

「そう言うこと。まあこの話は終わりだ。そろそろ帰るぞ」
「ん、そうだね」

話を打ち切り、俺達は立ち上がって帰る準備をする。
俺達の関係はこんなもんでいい。互いに隠し事はあるが、深く関わらないこのぐらいの距離感がちょうどいいんだろう。

……王子の秘密や隠し事は気になるが、俺はそれに突っ込める立場じゃないしな。

なんて事を考えながら部室棟を出て、校門に向かおうとした所で、遠くの方に見慣れてしまった女の姿がある事に気がつく。

「……げっ、あそこに姫宮いるぞ」

「……あれ、本当だ。こんな時間までいるのは珍しいね」

「そうなのか？」

「うん。姫宮さん、なんでも妹の面倒を見てるらしくて、いつも直ぐに帰ってるんだ……どうしたんだろ？ 校舎の裏に向かっているみたいだけど」

「へー」

そんな姫宮の意外な話を聞き、少しだけ親近感が湧くがそれを投げ捨て、校舎裏に向かう姫宮に目を向ける。

まあ、別に俺達には関係ないし俺はそのまま校門に向けて足を進める。

「……ちよつと気になる……ごめん、僕ちよつと見てくるよ」

「え？ あ、おい。待て——」

俺の静止の言葉も聞かずに、走り出す王子。

姫宮が苦手ならなんでわざわざ見に行くんだろうか、ほっておけばいいのに。

……つか、俺はどうすりゃいいんだ。このまま王子を置いて帰るか？ ……なんか、それで後で王子に文句言われるのめんどくせえしなあ。

いやまあ、文句言われた所で勝手にどっか行ったお前が悪いでどうにでもなるが……

「……あー、クソっ。めんどくせえ」

王子に騒がれる方が面倒だと判断した俺は、仕方なく姫宮と王子が向かった方に足を進める事にした。

しばらく進むと、校舎の影に隠れて様子を伺っている王子の姿を見つける。

それに後ろから近づいて、ちよんちよんと肩を叩く。

すると王子はビクッ！とわかりやすい反応を示した後に恐る恐るこちらを振り返ると、驚いたような表情を見せる。

(あ、天城君？　なんで……)

(勝手に帰って文句言われる方が面倒だから付いてきた。さて、姫宮の野郎はなにしてるんだ)

王子の真似をして、建物の影からひっそりと顔を出して校舎裏に居る姫宮の様子を伺う

そこに居るのは姫宮……と、あのいけ好かない転校生の姿。

なにやら話をしているようだが、姫宮の表情は険しいので仲良く話しをしているわけではなさそうだ。

(アイツらなんの話をしてるんだ?)

(うーん……ここからじゃ、よく聞こえないね……)

耳を澄ませてみるが、断片的にしか聞こえてこない。

じれったいと思っていると、転校生と話している姫宮の顔が嫌悪感に染まる。

「しつこいわね！　私はアンタが気に食わないの!!　失せなさい!!」

そんな明確な拒絶を見せる姫宮の叫びが耳に届く。

なるほど、転校生に言い寄られてそれを姫宮が振った感じだろうか？　それにしても手が早い男だなあの転校生。

なんて呑気に考えていると、転校生が姫宮の腕を掴み、ニヤリと気色悪い笑みを浮かべる。

「は、離して!!」

焦った様子の姫宮を見て、これは流石にやべえんじゃねえのか？

なんて思いながら王子を見ると――

「行ってくる」

そう一言だけ言って、王子は二人に向かって走る。

素早く二人に駆け寄った王子は転校生の肩を掴み、口を開く。

「そこまでだ。千堂君、レディの扱いがなっていないね」

「……はあ？ なんだ園崎、覗きか？ 趣味が悪いな」

「ははは……こんな所でそんな真似をしている君よりは良い趣味をしていると思うんだけどね？ ……姫宮さん、もう大丈夫だからこつちにおいて」

「そ、園崎君……」

肩を掴まれて注意が逸らされたのか、姫宮が手を振り払いそのまま王子の後ろに隠れる。

転校生は王子を見て、苛立ちの混ざった表情を浮かべる。

「相変わらず王子様の真似事か？ 雑魚がいきがつてんじやねえよ。潰されてえか？」

「そういうセリフは、僕の手を振り払ってから言ってもらいたいね」

「デメエ……！」

王子はそれなりの力で転校生の肩を掴んでいるのか、振り払おうとして振り払えなかった転校生が更に顔を苛立ちに染める。

王子、結構力強いんだよな……

「離しやがれ！」

「うわっ！」

「園崎君!？」

それを無理矢理振り払い、王子の胸を押して王子を後ろに下がらせる。

「……………」

その時、なにか違和感を感じたような表情を浮かべる転校生だが、顔を振り、そのまま王子に向き直る。

「ふざけやがって……園崎」ときが

一触即発。なんて表現が似合う空気だ。

……仕方ない。王子は一応女だし、これ以上出張らせるのは危ない。

「おい王子、こんな所で女と逢い引きか？」

その言葉と共に、俺も建物の影から出てその場に割り込む。

三人共驚いたような表情を浮かべるが、先に転校生が口を開いた。

「……園崎の知り合いか……チツ、シラケるな……」

「つか、姫宮もとつとと帰れよ、妹の世話で忙しいんだろうが」

転校生がなんか言ってるがそれを無視し、姫宮に向けてシッシと手を振り、早く帰れというジェスチャーを送る。

姫宮は何か言いたげな様子だったが、軽く頭を下げるとそのままその場から立ち去る。

「んじや、俺らもとつとと帰るぞ王子……その転校生も、こんな所で何をしてるが知らんし、クソ程興味もないがさっさと帰れよ」

「……ふん」

つまらなさそうに鼻を鳴らす転校生を無視し、俺は立ち惚けている王子の手を掴み、歩き出す。

「あ、あの、天城君？」

「話は後だ。とつとと歩けバカ。こんな所に女連れ込むとか、頭と趣味が悪い真似してんじやねえーよ」

「……あ？」

後ろで、転校生がなにかを言った気がするがそれを聞き流し、俺達はここから立ち去る。

「……気に食わねえ」

最後にそんな声を聞いた気がしたが、内心でそれはこっちのセリフだと吐き捨てたのだった。

「その、天城君。ありがとう。助かったよ」

「無茶すんなアホ。力強いって言っても無理すんな」

「うう……ごめんね。でも、ああいうの見ちゃうと、放っておけないんだ」

「……根っからの王子様気質だなあ、お前は」

王子の手を引いて、俺は帰り道を進む。

俺の言葉に困ったように顔をかく王子に、そんなだから女子にモテるんだよと言いたくなるが、これはコイツの気質だから言っても無駄かと思ひ、小言で済ませる事にする。

「いいか？ お前……王子の前に女だろうが。怪我でもしたらシャレになんねーぞ」

「――」

マイルドに言つたつもりだが、王子は顔を伏せて何も喋らない。

……これで言い過ぎだったりするのかわ？ だとしたら俺はなんも喋れなくなるぞ、なんて考えていると王子は顔を上げる。

その顔は、何故か赤くなっていた。

「その……天城君……そろそろ手を、離して欲しいかなあ……なんて」手？」

王子の言葉につられて、俺は手を見る。

……そこには、王子の手を掴んでいる俺の手。

「……………あつ」

そう言えば、さつきから掴んだまま――

その事実を理解した俺はすぐさま手を離し、混乱した頭で――

「べ、別にお前の心配してるわけじゃないんだからな!!」

「……………やっぱり天城君、結構なツンデレだよね！」

柔らかなく微笑む王子に、そんな典型的ツンデレ発言を返してしまつたのであつた。

16話

「天城、俺は思うんだ……モテたいって」

「いつも同じ事言ってるねえか？」

「だってよお！ モテたいじゃねえか！」

今日も今日とて朝っぱらから騒がしい井原の相手をしながら、俺はスマホを取り出す。

そこには、王子から送られたメッセージが表示されていた。

『今日はちよつと家の用事で休むよ！ ごめんね<><』

と、欠席である事を伝えるメッセージ。わざわざ報告してくるとか律儀だな……なんて思いながら『把握』とだけ返してスマホを仕舞う。

「井原のモテは置いといてだ、今日は王子休みだつてよ」

「マジか。風邪か？ ……そういや、前からちよいちよい休む事多いよな園崎。体でも弱いのか？」

「あれ、休む事多かつたか？」

「知らねえのか？ 園崎ちよいちよい休む事多いぞ。ちなみに俺は今のところ無遅刻無欠席の完全無欠の皆勤賞だな！」

「成績はもつとがんばりま賞だけだな」

「素直に褒めてくれよお!!」

成績以外は品行方正気味な井原は置いておいて、王子について考える。

確かに過去の記憶を遡ると、王子はちよいちよい欠席があつた気がする。今までそこまで王子について気に止めてなかつたから気が付かなかつたけども。

休みの理由は、メッセージの内容を見る限り体調不良ではないようだ。

……家の用事か。それは女である王子が男装してここに通ってる理由に関わる事なのだろうか？

たぶん、普通なら娘が男装して学校に通ってる事とか親が知らないはずないだろうし……

……なんか考え出したら凄く気になってきた。

「なあ井原、王子の親ってどんなのか知ってるか？」

「王子の親ア？ んなもん知るわけ……ん？ いや待て、そう言えば……」

なんとなく期待せずに投げかけた疑問だが、予想外な事に井原の記憶のどこかに引つかかったようだ。

「あれだ、授業参観あつたの覚えてるか？ 天城はサボってたけど」

「あー……そう言えばあつたな」

数ヶ月前、そう言えばそんな物があつた。

授業参観の日は確かに俺サボってたな。単純に起きたら昼だったからそのままサボっただけだけど。

「で、そんな時に王子のかーちゃん来てたんだよ。なんか、王子によく似た感じの上品なかーちゃんだったぜ」

「そんな時の様子は？」

「んー……なんつか、手に汗握る感じ？ なんかずっと王子の事凝視してた気がするな」

「なるほどな」

その言葉を聞く限り、親は王子の事を心配してるっぽいな。

……うーん、ますます謎が深まる。本当に王子はなんでこんな事をしてるのだろうか。

「つかいきなりどうした天城。王子の親なんか気にして……俺と同じで歳上趣味か？」

「ねーよ」

井原のアホの発言を受け流していると、教室の外から黄色い騒ぎ声が聞こえてくる。

まあ大体察しは付くが、なんとなく声の方に目を向ける。

案の定、そこには女を侍らせてご満悦と言った様子の転校生と転校生に侍らされている過去の王子の取り巻き連中である。

「早速人気者だなあの転校生。井原、モテたいならあの転校生にどうやったらモテるか聞いてみるよ」

「……いや、アイツはなんかいい。なんかやな感じがするし」

珍しく拒否感を露わにする井原に少し驚いていると、なぜか転校生

が俺達に向かって近づいてくる。

「よお、王子の付き人共。なんだ、園崎の野郎は休みか？」

開口一番に、喧嘩を売ってくるような物言いの転校生に凄まじくイヤツとする。

俺は無視しようとしたが、不機嫌そうに顔を歪めた井原が口を開く。

「んだよ転校生。いきなり失礼な物言いじゃねえか」

「はっ、そんな事はどうでもいい。園崎は休みかって聞いてるんだ」

「……俺に聞かんでも授業受けてたら分かるんじゃないの？」

と、そつぽを向いて答える井原に転校生は隠そうともしない舌打ちをし、そのまま俺の方を見る。

「まあ、園崎は休みだろうな？ 所詮園崎は園崎なんだよ。まあ、俺に

怯えるしか能のない弱っちい奴だしな？ お前らみたいなのと仲良

くやってるがお似合いだぜ」

そう、俺達にしか聞こえないように吐き捨てる転校生。

……あー、無理、無視するつもりだったが姫宮以上にムカつくわコイツ。

「ああ？ 昨日から園崎園崎園崎うるせえな。なんだ、王子のストーリーかテメエ？ 頭も趣味も悪いクソ気持ち悪いテメエみたいなのにビビって王子が休むとか有り得ねえわ」

「……ああ？」

「ナルシストも大概にしとけ性格ブスがよ。俺がもしお前だったら惨め過ぎて死んでるね。つーか、そもそもあの王子に顔も存在も忘れられてんのによくそこまで自信が持てるよな。恥ずかしくねえの？

……あ、恥がねえから今の今までのうのうと生きてこられたんだな。納得した」

「……んだとテメエ……！」

煽り耐性が全くない転校生が俺の胸元を掴もうとするが、転校生は不安そうにこちらを見ている女共を見てギリギリで踏みとどまったのか、舌打ち鳴らし手を引っこめる。

「はっ、噂通り口の悪い野郎だな」

「効いてないアピールか？　そういうのやると余計に惨めだな」

「……テメエも、タダじやすまさねえ」

怒気を孕ませた転校生の視線を片手でシッシと払い、転校生を視界から外す。

転校生が去って行く気配と共に、女共の声が耳に届く。

「千堂君、大丈夫？」

「天城には関わらない方がいいよ、王子も天城に関わってからおかしくなつちやつたし……」

「ああ、ありがとう。でも園崎の事で話があつたからな……心配してくれてありがとう」

なんともまあ、アホな会話が聞こえてくる。

……まあ、転校生の内面も見抜けない頭も尻も軽い連中みたいだしどうでもいいか。

あの連中を見てると、まだ姫宮はマシな分類だったんだなと思う。嫌いだけど。

「……気に入らねえ！　んだよアイツ、園崎のなんなのか知らねえが、俺らの友達をバカにすんじやねえよ。なあ天城」

「……まっ、気に食わないな」

ふんと荒い鼻息で言う井原に同意すると、何故か井原が少しだけニヤケながら俺に顔を近づけてくる。

「にしても、天城も友達のためにキレルんだな。熱いじやねえか！」

「……は？　なんの事だ？」

「今、園崎がバカにされたからキレたんだろ？　『テメエみたいなのにビビって王子が休むとか有り得ねえわ』って。」

俺もキレたかったけど、天城の勢いが凄くてなんも言えんかったぜ」

「……俺が？　王子の為に？」

自分が言つた事を思い返す。

『テメエみたいなのにビビって王子が休むとか有り得ねえわ』

『テメエみたいなのにビビって王子が休むとか有り得ねえわ』

『テメエみたいなのにビビって王子が休むとか有り得ねえわ』

「休み」

「ああ、今日は休みの日ね……」

王子について聞いたかっただけだと思い、簡潔に疑問に答えてやったが納得した様子を見せるだけで離れない。

……闇討ちでもしてくるのか？ と身構えていると、姫宮がそっぽを向きながら口を開く。

「……昨日、ありがとう。アンタのおかげで助かったわ」

そう言っつて、転校生を睨めつける姫宮を見て合点がいく。

「礼なら王子に言っつけ。助けに入ったの王子だし」

「そりやもちろん言うわよ。でも、アンタが割って入ってくれたおかげで喧嘩にならなかつたんだし……王子が怪我なんかしたら、私は悔やんでも悔やみきれないの。」

だから、アンタにもお礼はちゃんとやっておくわ」

「……そりやどーも」

俺の事が嫌いだろうに、礼を言ってくる姫宮。

余程王子が大事なんだなあと思うが、王子が女だと知ったらどうなるんだろうか……いや、まあいいか。

「喧嘩？ え、なに？ なんかつたのか？ 大丈夫か？」

「まあそれについては後で話す」

そう言えれば昨日の一件は井原にまだ言っていないなあと考えていると、教室に先生が入ってくる。

姫宮もそのまま自分の席に戻って行き、教室の連中全員が座ると先生が口を開く。

「おはよう……園崎は今日は休みか……クソっ、めんどいな」

教師としてはあるまじき言葉を吐く先生だが、それを気にする様子もなくそのまま言葉を続ける。

「えー、さて、そろそろ9月も半ばだが……来月の末に文化祭があるのはわかるよな？ で、そろそろ文化祭の準備になってくるんだが……」

そう言えば、もうそんな季節か……早いもんだなあ。

「でだ、今年の文化祭はちよつと色々違って来るんだが……まあ、それ

についてはまた後日話す。で、今日は文化祭の日程のプリントや保護者用のプリントを配る。前から後ろに回してくれ」

そう言って配られたプリントを読むと、まあそこに書いてあるのは文化祭の日にちや、保護者用に書かれているなんか意味のわからない事。

「でだ、天城。今日の帰りにこのプリントを園崎の家まで持って行ってやってくれ」

それらを流し読みして机に置き、そのまま先生の言葉に耳を傾けているとそんな意味のわからない言葉が飛んできた。

「えっ、なんでですか?」

「いや、お前園崎と親しいだろ最近。それにこのプリントは早めに保護者に渡したいんだよ、頼んだ」

「ええ……いや、それなら井原——」

と、そこまで口にした時点で気が付く。

井原がプリントを届けに行く。それはいい。

だが、王子が家でまで男装をしているとは思えない。それで、もし井原が普通に女っぽい格好をしている王子を見たでしょう。

………次の日、学校で俺に向かって「天城イ!? お、王子が、王子が女装してたあ!」………なんて、言いに来る未来が見える。

………一応、俺は月二万で王子のサポートをする身になっている。

こういう時、王子のカバーが出来るように動くの俺がやる事ではないのだろうか?

………仕方ない。

「………あー、はい。了解です。プリント、俺が届けます」

「おう、頼むな。さあ、連絡事項も終わったし——」

思いがけず、王子の家に行く事になった俺は世話のかかる奴だなど思いながら、授業を受けるのだった。

17話

「えー、なんでだよ天城。俺も着いて行くぞ」

「いらん。さっさと行ってさっさと帰るんだよ俺は。井原が居たらそれが無理そうだし」

「んでだよ！ 俺も園崎の家に行きてえ!!」

放課後、さっさとプリントを届けようと思いい教室から立ち去ろうとした所で案の定とも言おうべきか、井原に捕まってしまう。

「別に今度でもいいだろ。遊ぶ訳じゃねえんだし」

「まーそうだけど、園崎が風邪なら心配だから様子見てえじゃねえか。それに園崎の家も見てみてえし。な？ いいだろ？」

「と言われてもなあ……」

事情が事情なだけに、井原を連れて行くのはあまりよろしくない。

もし井原を連れて行き、王子の正体バレなんて事になったら目も当てられない事になるだろう。

適当に理由付けて断るか……断る理由を考えながら口を開こうとした所で、

「井原、その辺りにしておきなさい。王子が体調悪くて休んでるなら、大勢で押しかけたりしたら気が休まらないでしょ」

横からそんな助け舟が入る。

声の方を見ると、そこにいるのはここ二週間ほぼ毎日口で殴りあつてる女、姫宮。

姫宮からの助け舟に驚いていると、正論を言われた井原がウツと息を詰まらせる。

「それに、天城も言ってる通り遊びに行くわけじゃないでしょ。今回は大人しく天城に任せておきなさい」

「ぬ、ぬぬ……そう言う事なら仕方ねえか……天城、園崎の事は任せたぜ……じゃあな、また明日会おうぜ」

「いや、まあ、元からそのつもりだけど……また明日」

姫宮の言葉に井原は納得したように肩を落とし、俺にそんな言葉をかけるととぼとぼと教室から去っていく。

……そんな哀愁漂う背中を見送ってから、俺は間を置いて、口火を切る。

「で、なんだよ姫宮、今の助け舟は？　なんか企んでるのか？」

「別に。昨日の借りを返しただけよ。アンタとの間に貸し借りなんて絶対に作りたくないもの」

「それは、俺も同感だな」

俺も姫宮と同じ立場なら、姫宮と同じ事を思っただろう。

俺達は例えるなら水と油。犬と猿。きのことたけのこ。決して混ざり合う事がない者同士だし、互いに関わり合いになりたくない相手だし、王子の事以外では関わる事も無いのだろう。

だがそれでも、少し気になった事があるので口を開いてしまう。

「にしても、意外だな。お前がプリント届けると言うと思ったんだが」

そう、俺は王子にプリントを届ける事を引き受けた。

その時に横から姫宮が「私が届けます！」なんて言ってくるかと思っただがそんな事はなく、何事もなく放課後まで来た。

正直、かなり意外だった。

そんな俺の疑問に答えるかのように、姫宮は今朝みたいにそつぽを向きながら口を開く。

「別に、私が行くよりアンタの方が王子は喜ぶでしょう。……一応、一応、本当に一応、アンタは王子の友達なんだし」

「どんだ俺が王子と友達なの嫌なんだよ」

「物凄くよ！　……コホン、まあ、そういう事よ。いい？　私はアンタが大嫌いだし、アンタが王子の友達だなんてとても嫌。」

……だけど、非常に、ひじょーに、ひっ……じょーに、不本意極まりないけど、アンタが一応王子の友達だって事を認めてあげるわ」

「別にお前に認めて貰わなくてもいいんだけどな」

「本当に口が減らないわねアンタは……」

「まあ、認めてもらったついでにも一個聞きたいんだが、昨日のアレはなんだったんだ？」

その言葉と共に、俺は転校生の席へと目を向ける。

もう転校生は帰っているのでそこにあるのは誰もいない席ではあ

るが、俺の目線につられて同じく転校生の席を見た姫宮は、嫌な物を見たかのように眉をひそめる。

「呼び出されたのよ。聞きたい事があるって。それで校舎裏に行ったら……まあ、口説かれて拒否したらああなったのよ」

「ふーん……よくあるパターンだな」

「……思い出したら気分が悪くなってきたわ。全く、なにが気の強い女は好みよ。あの天城と同レベルのナルシスト……」

「転校生と同列に扱うんじゃないよ」

「へえ、私以上の顔をしてるとか豪語した奴が何を言ってるのかしらねえ?」

「正確には俺以下の顔って言っただろ。捏造すんな」

「ほぼ同じ意味でしょ」

呆れるようにそう言うのと、姫宮もカバンを手に取り、そのまま立ち去ろうとすると、

「王子の事、頼んだわよ天城。王子、結構抜けてるから大変だろうけど」

そう言い残し、教室から去っていった。

「……んな事、とっくに知ってるわ」

ここ二週間の思いがありっただけに詰まった言葉は、誰もいない教室で木霊するのであった。

「確かこの辺り……だよな?」

教師から聞いた住所を頼りに、スマホで地図を開きながら王子の家へと向かう。

周りを見ると、ここが所謂高級住宅街と呼ばれるような場所だと言

うことがわかる。

まあ、聞いてる話だと王子の家は金持ちっぽいし驚きはないが……だがしかし、こういう場所とは無縁だからなんというか、慣れない所はある。

右を見ても高そうな家、左を見ても高そうな家。果たして家賃はいくらなのだろうか……

「しかし、場所わかんねえな……王子にメッセージでも送るか」

そう思いつき、スマホの地図を閉じてメッセージを送ろうとした瞬間、表札に『園崎』と書かれた一際大きな家を発見する。

ここか？ 住所的にはここだと思うが……スマホを仕舞い、家を見る。

「……にしても、デケエ」

それが、王子の家を見た俺の感想である。

洋風の屋敷？ ほど大きくはないが、それでも普通の一軒家と比べるととても大きい。

白で統一された建物からは清潔感と高貴さが漂っており、正しく金持ち！ みたいな感じだ。

「えーと、インターホンインターホン……あつた。家がデカくてもインターホンは普通の家と変わらないんだな……」

そうボヤきつつ、見つけたインターホンを押す。

……少し待ち、インターホンからプチリと、通話が繋がったような音がしたと思ったら、インターホンから声が聞こえてくる。

『はいー……どちら様でしょうかー？』

聞いた事もない、間延びした女性の声が聞こえてくる。

王子の母親だろうか？

「あー……天城と言います。おう……園崎輝君の友達なんですけど、プリントを届けに——」

『まあー輝のー！』

俺の言葉に喜色混じりの声で割り込むと、インターホンが切れる。

あれ？ と思っていると、玄関が開かれ、家から一人の女性が出てくる。

王子とよく似ているが、王子更に上品させ、おっとりした雰囲気
の女性だ。

「まあまあ！ 輝のお友達だなんて久しぶりだわあ……ささ、上がっ
て上がって。輝も喜ぶわあ」

「え、いや……」

「ささー！ どうぞどうぞー」

プリントだけ渡して帰ろうと思っていたが、強引に家に上げられ
てしまった。

……まあ、王子に挨拶して行くのもいいか。

王子の母親に案内され、そのままリビングまで通される。

とても大きいリビングで、置いてある家具も高そうでソファもふか
ふかだ。これが金持ちの力か……ソファの高級さを堪能してい
ると、王子の母親がお茶が入ったグラスをもつて戻って来る。

「ごめんなさいねえ……もつと色々おもてなしがしたいのだけど、今
から出かけるのよ……」

「ああいや、お構いなく。俺もそこまで長居する気は無いので……こ
ちらこそ突然押しかけて申し訳ないです。すぐに帰りますから」

「いいのよお、輝のお友達なんて久しぶりなもの、ゆつくりしてい
つて……」

そう言つて、ニコリと微笑む王子の母親に頭を軽く下げてから、出
されたお茶を口へと運ぶ。

……うめえ、これが金持ちのお茶か。

「それにしても、輝のお友達だなんて本当に久しぶりだわあ……天
城くん、これからも輝と仲良くしてあげてねえ」

「あー……はい。輝君が良かったら仲良くしたいなと俺も思います」

実際は、友達のフリというか友達代で雇われてるといふ大変不健全
な関係なので、王子の母親の言葉に少し気まずい物を感じながらも、
常套句で返す。

そんな俺の内心も知らずに、王子の母親は更に笑みを深める。

……き、気まずい……

「あ、私はそろそろ出かけないと……ごめんなさいねえ……」

王子の母親はそう申し訳無さげに言うと、そのままササツと出かける準備を整える。

良かった、ナイスタイミングだ。

「輝は二階の部屋に居るから、声を掛けると出てくると思うわ。ゆっくりしていつてねえ」

何処までも間延びした声を残し、王子の母親は足早に出かけて行った。

……なんというか、色々ほんわかしてる人だな。というか俺を残して家を出たけど、もし俺が不審者というか悪党だったりしたらとか考えないのだろうか……？

人様の家のセキュリティ一事情に少し不安を抱きつつ、出されたお茶を飲みほし、立ち上がって階段へと歩を進める。

2階に上がると、いくつかの部屋の扉がある。『茜』と書かれている扉があるのを見つけたので、同じように『輝』と書かれた扉を探すと、すぐに見つける。

「おーい、王子。天城だけど、生きてるか？」

ノックをし、部屋の外から声を投げかける……が、反応はない。

寝てんのならプリントだけ置いて帰ろうかな……と思ったが、王子に鍵閉めて貰わないといけないので、起こすために再度ノックをするが相変わらず反応がない。

……埒が明かれないと思った俺は、ゆっくりと扉を開ける。

そして、俺はドン引きした。

「……………汚ったなっ!？」

床に散らばる漫画、ゲーム、ラノベの山に、食い終わった菓子の空箱、空袋が散乱していて、正直足を踏み入れたくないぐらいの汚部屋がそこには広がっていた。

「……………こりゃねえだろ……」

女の部屋ってのはもつと、可愛らしい系なんじゃないのだろうか？

これならまだ井原の部屋の方が綺麗だぞ……いやまあ井原の部屋って結構整理整頓されてるけどって違うそんな事は今はどうでもいい。

部屋に転がっている中身の残ったペットボトルを見て意識が吹き飛びそうになるが、なんとか意識を取り戻し部屋を見渡す。

……居た。部屋の奥で鎮座するバカでかいパソコンの前で、呑気に突っ伏して寝ている王子を。

俺は空いてる足場を通り、王子の後ろに立った俺は王子の頭を軽く叩いてやる。

「おい、起きろ汚部屋王子。お前……これは、ダメだろ……」

「ん……ん……？」

頭に加えられた衝撃で王子は身を振り、突っ伏していた頭をゆつくりと起こす。

「……？」

寝ぼけた様子で、王子は俺の方に振り向く。

寝起きだからか、いつものキラキラした目とは程遠い死んだ魚みたいな目を向けてくる王子に少し驚く。

「……!?!」

俺を見た王子が、驚いたような表情を浮かべて俺を指さす。

いやそりやまあ、寝て起きて俺がいたら驚くだろう——

「……誰?!」

「……はあ?」

どうやら王子の寝起きは思った以上に悪いみたいだ。

まるで、俺を知らないみたいなおかしい様子を見せる王子に呆れつつも、ここに来た目的を果たす為に口を開こうとした所で、

「はっ! ……これは……所謂悪魔との契約フラグでは! ……冴えない僕の所に願いを叶えてくれる悪魔が現れて……みたいな! ……なんか前髪が不気味に隠れてるし間違いなく悪魔だよ!」

「はっ?」

「悪魔さん! ……異世界に転生させてください!! ……そして出来ればチートとチヨロインもおお!!」

「……寝ぼけてんのか?」

「……ええと……転生……」

なんか、どんな反応をすればいいのかわからないし、王子も思っ

いた反応を得られなかったからかオロオロし始める。

「……………うん、見なかった事にしよう。その方が王子もダメージないだろう。ボケが受けなかった時のダメージは大きいだろうし、なんもかもなかったことにしよう。」

「……………と、とりあえずプリント届けに来たぞ。つたく、家と逆の方向だったから手間だったぞ」

「……………プリント?」

カバンから文化祭のプリントを取り出して王子に渡すと、王子はそれを読み始める。

「聖ヶ丘学園、文化祭……………聖ヶ丘……………あつ、あ……………なるほど……………」

王子はハツとしたような表情を見せたと思うと、そのままなにやら考えるように口元に手をやる。

一体何考えてんだらう。

「え、ええと……………ぐ、ぐめんよ。少し寝ぼけていたようだ……………」

「寝ぼけてなくてあの有様なら正気を疑うぞ」

「忘れて!! お願ひ!!」

「そんな必死に頼み込まなくても忘れてやるから安心しろ。つか、お前……………」

ふと、必死な様子の王子の服装に目を向ける。

普通に、俺から見てもそれなりにオシャレに見える、男物みたいな青いシャツを身にまとっている王子。その胸は普段と変わらず、サラシを巻いてるからか真つ平らである。

ポンコツかと思いきや、家でまで男装をしている王子に中々やるなという念が浮かぶ。というか……………」

「お前さ、そんなオシャレシャツ持ってるなら普段から着てこいよ。この前のパンクロッカーみたいな服装とか二度とやめてくれ」

「……………えっ、そんな格好……………してたの……………?」

「いや、つい四日前のことだろ。忘れんな」

「……………ま、マジか……………」

自分でやった事なのに頭を抱えている王子になんとも言えない疑

念が湧くが、とりあえず目的は果たしたので俺は帰る事にする。

「とりあえず、帰るから鍵閉めてくれねえか？　王子の母さん、出かけたみたいだし」

「う、うん……わかったよ……」

まだ少し寝ぼけて足元が覚束無い王子を引き連れ、俺達は部屋から出て下に降りる。

そしてリビングまで差し掛かった所で、俺は口を開く。

「つか、お前部屋片付けろよ。汚すぎるだろ」

「あー、その、気が向けば……」

「それやらない奴の常套句だろ……あ、つか王子、お前家だと基本的にその格好か？」

「え？　う、うん。一応……」

「んじや、井原が来ても大丈夫だったか……いらん気回さんでよかったな」

「ご、ごめんね……？」

「いや、別に謝らんでもいい。つかその辺りのサポート含めても友達代だろ」

「………友達代イ!」

俺が零した言葉に、王子が叫ぶように言葉を返す。

「え、待って、僕と君って、友達……なんだよね？」

「いや、そういう事になってるだろ、周りには」

「……なのに、友達代？」

「友達代」

「……どゆこと!」

頭を抱えて悶える王子。

コイツ、自分から言い出した事なのになにをそんなに驚いてるんだ？　流石に、ちよつとおかしくないか……なんて事を考えていると、玄関の方からガチャリと扉が開く音が聞こえてくる。

「たっだいまー！　……あれ、この靴……お客さん来てるのかな？」

そんな、どこかで聞いたような声が、玄関から聞こえてくる。

……あれ、この声……？

「んー？ 誰が来てるんだろ。あの靴、どっかで見た事
……………えっ」

「……………はあ？」

玄関の方から、一人の女が姿を表す。

金色の髪に、宝石のような青い瞳を持った、どこかで見たことある
ような制服を身にまとった女がそこに居た。

そして、その女の顔はここ二週間の間にほぼ毎日見てる顔にしてお
り、隣で頭を抱えている王子と『瓜二つの顔』をしており――

「あ……天城君?! なんでウチに居るの!?!」

俺と顔を合わせた瞬間、その女は俺の名を呼んだ。

……………つまり、これは、ええと、なんだ……………?!

「えっ、お前が……………王子?」

「……………え、えっと……………そう、だけど……………」

「じゃあ、これは?」

そう言つて、さっきまで王子として扱っていた、王子のそっくりさ
んを指さす。

王子のそっくりさんは相変わらず頭を抱えているが、そんなそっく
りさんを見た王子は、目を宙に彷徨わせ、やがて観念したかのように
ため息を吐いた。

「……………その人は私のお兄ちゃんだよ、天城君」

18話

「……………」
「……………」
「……………」
お通夜か。と言いたくなるぐらいに沈黙が支配するこの空間で、俺達三人は向かい合わせで座っていた。

王子は気まずそうにしており、その王子の隣で王子の兄……ややこしいからパチ王と呼ぶ事としよう。

パチ王は顔を下げ、目を合わせようとしない。

同じ顔をしているが、なんとという対称的な兄妹だ。妹は陽キヤで兄は陰キヤ、そんな感じだ。

「……で、黙ってても状況なんも変わらんから喋るが……その、なんだこの状況?」

「いやそれ私が聞きたい事だよね!? なんで天城君とお兄ちゃんが!?!」

「なんでって言われても……お前が休んだからプリント届けるハメになったんだよ。ほれ、パチ王に渡してるプリント」

「えっ、パチ王ってなに!? 僕に変なあだ名つけないで!?!」

あだ名にツッコむパチ王だが、俺と顔を合わせた瞬間にまた顔を下げ、目線を逸らす。

なんだ? と思っていると、王子がパチ王の手からプリントを取り、プリントに目を通す。

「あー……そっか、そろそろ文化祭か……ありがとう。助かったよ天城君……でもこれ、お母さんに渡してくれてたら良かったのに」

「そう思わないこともなかったけど、王子の母さん直ぐに出かけるみたいでバタバタしてたし、後一応お前に挨拶してこうかと」

「そっか、お母さん買い物行く時だったのか……納得」

「んで、お前の部屋……というか、パチ王の部屋に訪ねたらエンカウントしたんだよ」

「なるほど、理由はわかった……うーん……どうしよう。想定外

過ぎて頭が回らない」

「俺も想定外過ぎるわ。てかさ、お前ら双子？ 恐ろしいぐらい顔も声も背丈も似てるし」

「そうだよ。でも実は私の方がちよっぴり背は高いよ」

「クソどうでもいい情報だ……」

「ひどい！」

「あ、あの……」

と、ここでパチ王がおずおずと手を上げるが、相変わらず顔を合わせようともしない。

「天城さん……は、その、事情を知ってる方でして……？」

「まあ、一応大雑把に……」

「事情を知ってる……友達代……荒っぽい口調……そうか、わかったぞ!!」

パチ王は急に顔を上げて立ち上がると、ダンと机に足を置きビシツと俺に指をさす。

「つまり！ 天城何某さんは僕の妹の正体を知り、友達代と称して妹からカツアゲをしているわけか……！ くつ、どうりで口が悪いと思っただんだ！」

「はあ？」

「くつ！ 帰れえ！ 僕はヤンキーとかその手の人種が嫌いなので今すぐお帰りくださいませ！ お願いします!!」

「……お前ら兄妹は基本的にポンコツなのか？」

「違うよ!? お兄ちゃんも天城君も違うから！ とうかお兄ちゃん！ 机に足乗せないで！ お行儀悪いよ！」

「い、いや、僕は茜の事を思って……」

「それに、私はカツアゲされてもないよ。友達代の話は私から持ちかけた事だし……口が悪いのは……その、天城君の味だよ！」

「フオローするか貶すかどっちかにしろよ」

「いや、だって天城君実際お口は悪いよ……？ えげつない口撃力だよ？」

「俺の口が悪いんじゃないやなくて周りが俺の口を悪くさせてるんだよ。俺

の口は周りの奴らによってバフ盛られてんの。支援されたら私怨で返すしかないだろ」

「微妙にそこまで上手いこと言えてないよ！」

「ちよつと!! 僕を置いて仲良くしないでよ!! 悲しくなるでしょ!!」

「お兄ちゃんの立ち位置はなんなの!? とうるか話! 元に戻すよ!」

閑話休題。

色々とかオスな空気になってきたが、王子のその一声と共に話を本筋に戻し、いまだに落ち着きのないパチ王に事情を一から説明する。

「えつと……つまり、色々あって妹の事を知った天城は妹と関わらないようにしたけど、逆に妹から頼み込まれてフォロー役? として友達代で雇われてる……って事ですよね」

「まあ、大体その通り」

「なる、ほど……よ、よかった。天城さんはヤンキーじゃないんだね。ふう、一安心だよ……」

「つか口調だけでヤンキーとか大袈裟だろお前」

「ヤンキーの話はもういいよ! いや本当、妹の友達がヤンキー口調で友達代を請求してくる件について。なんてラノベみたいなタイトルが頭に浮かんだけどそんな事はなくて良かったよ……」

「お前は何を言ってるんだ?」

「くっ! それはそれとしてこんな所に居られるか! 僕は部屋に帰るぞ! 溜まつてるゲームがまだ消化できてないんだ!」

「その前に部屋片付けろよ」

人の話を聞いているのか聞いていないの、そう言い残して慌ただしく部屋に戻っていくパチ王。

「……なんか慌ただしい奴だなあ」

「その……お兄ちゃんは人付き合いが苦手らしくて……ごめんね。許してあげて欲しい」

申し訳なさそうな表情を浮かべている王子に視線を向け、俺は大体察しはついているが、確認の為に口を開く。

「あのさ、お前の事情は今まで聞かなかったけど……流石に聞かせてくれ。気になる」

「うん、そうだよね……どこから話した物か……」

「一つ息を吐いてから、自分の記憶を思い返すように王子は話し始める。」

「と、その前に……改めまして天城君。私は園崎茜（あかね）。こっちが本当の名前だから、改めてよろしくね」

「まあ、そうだよな……」

「……それじゃあ、そうだね。もうバレちゃった事だけど……私は、お兄ちゃんの代わりに聖ヶ丘学園に通ってるんだ」

「だろうなあ……」

案の定というか予想通りというか、察していた通りの言葉が王子から返って来る。

肝心なのは、なぜそんな事になったのか、である。

俺は黙って話の続きを待つ。

「……なんでかと言うと……私のお兄ちゃん、中学を卒業した時に学園には二度と行きたくない！　って言い出したんだ。だから、私がお兄ちゃんの代わりに学園に通って、代わりに卒業しよう」と

「……話が飛んでないか？　なんでお前の兄貴は引きこもってて、お前が代わりに学園に通うなんて真似してるんだ？　いくら兄妹とはいえ、お前が……なんだ、自分を犠牲にする必要あんのか？　そもそもお前、自分の学校は？」

「あ、学校は大丈夫。これでも私、それなりに大きなお嬢様学園で特待生やってるから、出席とか色々免除されてるんだ」

「いや、免除って言ってもだな……」

「それに」

あまり納得がいかない俺の言葉を遮るように、王子は言葉紡ぐ。「お兄ちゃんが引きこもってるのは……私のせいだから。こうしてお兄ちゃんの助けになれるなら、これでいい」

王子の口から、そんな思いもよらない言葉が出てきて驚く。

王子のせい？　こんな、ポンコツなだけで人畜無害に等しい、王子

のせい？

……いや、ない。それはないだろ。

だってコイツに、一人を引きこもり追い込む事ができる精神性な
んかない。むしろ引きこもりを助けるために尽力しそうな奴だ。

けど、王子の顔は嘘を言ってる。

今までで一番真剣みの帯びた表情している。

「だから、私は大丈夫。心配してくれてありがとう、天城君」

「別に心配してねえよ。ただ、学歴とかどうなるか気になっただけだ」

「それ、心配してるって言うんだよ」

何がおかしいのか、柔らかに笑う王子を見てどこか気恥ずかしく
なった俺は王子から目を逸らす。

別に、心配じゃなくて気になっただけだ。一応知らない奴ではない
んだし、気にしない方がおかしいだろ。

自分の内心でそう言い聞かせるように浮かぶ言葉を振り払い、誤魔
化すように俺は口を開く。

「で、お前のせいってなんなんだよ。俺からすりゃ、お前のせいで人が
不登校になるとか考えられん」

「それは……………」

王子が、その先に続く言葉を言おうとして、少し躊躇った様子を見
せるとそのまま口を閉じる。

「…………ごめんね。これ以上は私の問題。だから言えない」

「はあ？ いや待てよ、ここまで聞かせといてその先は秘密とか、そ
りやないだろ」

「ごめんね。でも、これ以上天城君にもたれ掛かるわけにはいかない
し…………これは私がなんとかしなきゃ行けない事。だから…………言えな
い」

明確な拒絶ではなく、明確な意思が宿る王子の瞳にこれ以上聞いて
も無駄だと察した俺はため息を吐き、話を打ち切る事にする。

「へいへい、秘密の多い王子様だ事で」

「あはは…………お互い様という事で、ね？」

「別に、俺の秘密なんざな——」

「だったら、天城君の顔、見てみたいな。私、天城君の顔は一度も見たことないし」

.....

「この話はやめだ。やめりやいいんだろ」

「……ありがとう」

「んな申し訳なさそうな顔すんなら最初から言うなつての……それに、別に重苦しい理由で顔隠してるわけじゃねえから、シリアスな空気にするな。むず痒い」

たぶん、周りからすりやくだらしない理由だし。という言葉が続けようとした所で、俺の持つてるスマホが震える。

スマホを取り出すと、そこには妹からのメッセージ。

『兄貴夕飯当番忘れてない？ お腹空いた。メシー』（・3）（）』

「……やつべ、忘れてた」

「ん、どうしたの？」

「いや、今日俺が夕飯作る日なの忘れてた。早く帰らないと」

「それは一大事だね。早く帰らないと」

丁度、少し気まずい空気が流れていた所でこのメッセージ。

同じく気まずかった様子の王子は立ち上がると、急かすようにそう言ってくる。

まだ気になる事はあるし、話したい事もあるがこれ以上長居もできないので俺も帰る準備を整え、玄関へと向かう。

「んじゃ、邪魔したな」

「いやいや、来てくれてありがとう。おかげで助かったよ」

「つかさ、お前の兄貴に部屋片付けるように言っとけ。マジで目眩がしたぞあの部屋」

「……あ、あはは……」

世間話もそこそこに、少しモヤモヤした物を残しながらも俺が立ち去ろうとする。

「あ、あのね天城君」

その時、王子から声がかかり、引き止められる。

なんだ？ と思いながら振り返ると、王子は照れくさそうな様子で

顔を触りながら、唇を開く。

「言えない事もあるけど……私は、天城君のおかげで学園が楽しくなったんだ。天城君と会って、井原君とも友達になれて……諦めてた事が、少しだけ叶ったんだ。だから、本当にありがとうね、天城君」

真剣に、まっすぐと瞳を見つめながらそんな言葉を吐く王子。

その言葉に嘘はないのだろう。純粹に、心からの言葉なのだろう。

なんのお礼なのか、わからないし知る事もない。

ただ、どこか諦めが宿ったように聞こえた言葉に俺は――

「そんな礼より、お前の話が聞きたかったね」

非難するようにそう返して立ち去る。

………友達代とか払ってんなら、もうちよいこつちにもたれかかれよ、あのポンコツバカが。

そんな疎外感を感じながら、俺は帰路についたのだった。

井原友樹のキングオブエジプト

「そーういや天城、エジプトって……いいよな」

「何いきなりわけわかんねえ事言ってるんだよ」

昼休み。おにぎりにかぶりついていると井原が突然そんな意味のわからない事を言い出した。

「だってよお、ロマンがあるだろロマンが。宝とか……冒険とか、宝とか、財宝とか」

「3/4は同じ意味じゃねえかよ」

「うるせえ！ 時代はエジプトなんだよ!!」

「というか、なんでエジプト……?」

「いや、昨日見た映画がエジプトのピラミッドが舞台のクソ面白い映画だったんだよ。ハムナントレーみたいな名前の」

「名前うる覚え過ぎじゃないかい……?」

「こまけえこたあいいんだよ!」

王子のおかげで井原が何故いきなりエジプトあーだこーだと言いつ出した理由が判明した。確かにあの映画は面白いし、まあ井原がエジプトエジプト言うのかわかる。

……よし、エジプトで話を広げるか。

「そう言えば、エジプトのお土産とかって何が有名なんだろう?」

「エジプト土産え? なんだよ天城、いきなり話がスフィンクスじゃねえか? もっとオジサンディアスみたいな話しようぜ」

「お前ただ単にエジプトチックな単語使いたいだけだろ」

「というか、それを言うならオジマンディアスだね。ラムセス二世とも言うけど」

「ええい! カタカナで話すんじゃないやねえ! 天城の土産の話しようぜ!」

「はいはいスフィンクスな話な。」

いや、確かにエジプトってよく聞くけどさ、実際エジプトとかに旅行行ったらどういうお土産があるんだ? 地味に気になる」

「……確かに、エジプトのお土産ってなんなんだろうね?」

「そりや、やっぱり置物とかじゃねえの？　なんかアニメとか漫画だと不思議な置物みたいなのをエジプトから持ってくるイメージあるぞ」

「ああ、確かに。千〇アイテムもその代表だよね」

「逆に聞くと、それ以外なにあるんだエジプト……」

「……………」

「……………」

『なんだろう、エジプト……』

ふとした疑問を言ったつもりが、思いの外深い闇を発掘した気分だ。

なぜだ、なぜここまでエジプトは有名なのに俺達の認識はこうもふわふわなんだ。

「……天城君、井原、どうやら僕らはエジプトという固定観念に引つ張られ、縛れてるようだ……」

「なんだって!？」

「どういう事だ、王子」

「そうだね、僕らの無意識に染み込んでいるんだ。エジプトは歴史があり、不思議な置物であってファラオでピラミッド……そんな、どこかふわふわな共通認識しかないんだ、僕らにとつてのエジプトは」「園崎、もつとわかりやすく」

「あれだよ、バニラビーンズって響きだけで甘いと思ってたけど、実際バニラビーンズ舐めたら苦かった、みたいな」

「なるほど!!!」

「むしろなんでバニラビーンズの例えでわかったんだよ」

「とにかく!!　つまり僕らは本物のエジプトを知らないって事さ!

ただ皆が『エジプト』と思ってるなんの根拠もない認識を僕は持っているだけ!　これはつまり、僕らはまだエジプトを知らない!!」

「なるほど、一理ある」

確かに、俺達はエジプトを知った気になっていただけでエジプトの事なんて欠片も知らないのだろう。

深いな、エジプト……

「じゃあ、その固定観念を全て取り払って改めてエジプトについて考えてみようぜ。まだ授業まで時間あるし」

「そうだね……」

「土産の話からツタンカーメン並に話が異次元だぜ……」

俺達三人は腕を組み、ありのままのエジプトを思い浮かべてみる。

砂漠、ピラミッド、スフィンクス……ダメだ、それしか浮かばねえ

！

「おい王子、お前なんか浮かんだが？ 真のエジプト」

「……ダメだ、確か紅茶が有名なはずなんだけど……エジプトと噛み合わない」

「紅茶はフランスなイメージだな……」

「なあ、一個思いついたんだけどいいか？ 真のエジプトってやつをよ」

ここで、あまり期待していなかった井原から声上がる。

特に期待はないが、とりあえず井原の語る真のエジプトに耳を傾ける事にする。

「エジプトってき……キングだろ」

「……キング？」

「なんで、キング？」

「エジプトってファラオで有名だろ。ファラオ、つまり王、つまりキング！ そして考えろ！ エジプトって聞きや真っ先にファラオやらピラミッドが浮かぶじゃねえか！ つまり、真のエジプトは……キングだ!!」

「……確かに……」

「言われてみれば……」

井原の熱弁が、すくと俺の脳内エジプトに収まる。

そうだ……確かに、エジプトはファラオ……キングのイメージがある。

「これは、エジプトだね……」

「ああ、これが真のエジプト……やるな井原」

「へへっ……これが俺の真のエジプト、井原友樹のキング・オブ・エジ

プト……そう、キングオブエジプトだ!!」

「中々にファラオじゃないか、井原」

「ああ、今日の井原はナイルがごとく輝いてるな」

「ふっ、褒めるな褒めるな……あまり褒められるとミイラがりビングデッドだぜ」

ここで、チャイムが鳴って休み時間の終了を告げる。

「げっ、もう終わりか。せっかく盛り上がったのにアヌビスな気分だ」

「思いの外エジプトで盛り上がったのに……全く、ピラミッドだよ」

「仕方ねえ! また後でホルアクティろうぜ!」

こうして、俺達の休み時間はホルスへと吸い込まれていったのだっ
た……

「いや、それも空想上のエジプトでしょ!? とうるか発言の中になん
でエジプトチックなの混ぜてるの!?!」

姫宮がなんか叫んでるけど、特に興味もないのでそのまま受け流す
事にした。

19話

「兄貴、帰ってきてからずっと面白い顔してるけどなんで？」

「はあ？　んな顔してねえよ。いつも通りだつての」

「えー？　なんか苦虫を噛み潰したような顔というか、腑に落ちないみたいなの顔してるじゃない。なに？　なんかあったの？」

「別になんもねーよ。つか喋ってないではよ食え」

「兄貴が作るの遅かったら噛み締めて食べてるの。あー、お腹すいてる分ご飯が美味しいわ」

「ああ言えばこう言うなお前は」

「兄貴にだけは言われたくない。あ、醤油取って」

帰宅した俺は冬華の非難混じりの視線を受け止めながら夕飯を作り、そのまま冬華と共に夕餉をとっているのだが、何やら冬華が俺の様子を訝しんでいるようで、さつきからちよいちよいそんな質問を向けてくる。

「というか、帰ってくるのも遅かったし絶対なんかあったでしょ。私の目は誤魔化せないわよ」

「だから、プリント届けてたんだよ。んで話し込んで飯当番の事忘れてたんだつて。遅れたのは悪かったよ」

「……口が堅いわねえ……」

一応本当の事を話すが、それでも冬華はこちらに疑いの目を向けてくる。

ちつ、やはり妹である冬華相手に誤魔化すのはめんどくさい。この時ばかりは血の繋がった兄妹である事を恨む。

「まあ、話す気ないならもういいけど……」

冬華もこれ以上聞いても無駄と察したのか、腑に落ちない顔はしているがそのまま夕飯を食べ始める。

……というか俺そんな顔してたのだろうか？　気になって自分の顔を触るが何もわからない。いや顔触って自分の表情わかるわけないだろ、何してんだ俺。

謎の行動をする自分にセルフツッコミをしていると、ふと冬華が何

かを思い出した様な表情を浮かべる。

「あ、そう言えば兄貴。なーにが男友達でガーランド行ったよ。しっかり女の人と行ってるじゃない」

「はあ？ 今度はその話かよ。だから男友達と行ったって何回も——」

「いや、あの人どう見ても『園崎茜さん』じゃない。どうりで見覚えあると思っただわ」

「ぶっ!？」

「汚っ!？」

冬華の口から思いもよらない名前を聞いて、思わず吹き出してしまった。

「……なんで冬華からその名前が?!」

「お、おい冬華、なんで王子がその名前だつて知ってるんだ……?」

「なんでもなにも、園崎さん私の先輩だし」

「王子がお前の先輩!? んな話初めて聞いたぞ!？」

「そりや今初めて言った事だし。そもそも私、園崎先輩と面識ないし……というか兄貴こそ知らなかったの?」

「んな事知るわけない……」

と、このまで口に出した所で、俺はさっきの王子の服装を思い出す。思えば、どこか見た事があるようなデザインの前着だった。

「……思い直すと、あの制服は冬華が通ってる学園の制服のデザインと似通っていた。」

「……冬華が通ってる学園は中高一貫。となると中学と高校で制服は違うだろうが、同じ学園となると、デザインは似通っていてもおかしくないわけで——」

「……マジか……なんだよこの、世界が狭い感じ。まさかアイツがお前の先輩だなんて……」

「なんで兄貴がそんな驚いてるの……?？」

意外な所で意外な繋がりには驚きを隠せない。

マジか、冬華の先輩だったのか王子……いや、ちよつと待て、俺今不味い事色々吐いたような——

「さて、兄貴も色々驚いてるみたいだけど、全部吐いてもらおうかしら？」

「……………あつ」

ニツコリと、完璧な笑顔を浮かべる冬華。

俺にはわかる。あの顔は絶対吐かせると決めた時の冬華の顔だ。

だがしかし、だからと言ってはいそうですかと全てをゲロる俺ではない。

ポーカーフエイスを作り、冬華と真正面から向かい合う。

「……………さあ、飯食うか！ 冬華もはよ食え、冷めるぞ」

「ものつすごい雑な話変え方で誤魔化せるとでも？」

「知ってるか冬華、カップラーメンに含まれる塩分は人間が一日に摂取しなきゃいけない塩分と同じ量なんだ」

「じゃあ、カップラーメン食べた日は塩分含まれてる物が食べれないじゃない」

「塩分だけに世知辛いよな」

「なんも上手いこと言えてないし、そもそもそれで話を誤魔化せるわけないでしょ」

クソみたいな話で、言い訳が浮かぶまで時間を稼ごうと試みるが冬華はそれらをあしらひ、話を詰めてくる。

どうした物か……と、考えていると冬華は諦めたようにため息を吐いた。

これは、諦めたのか……？ そんな一抹の希望が浮かべていると、冬華はスマホを取り出し、口を開く。

「兄貴に聞いても教えてくれないみたいだから、井原さんに聞くね？」

この前のプリクラ、井原さんも写ってたし事情知ってそうだし」

「ぐっ……………」

それは大変まずい。

井原は何も知らない……なので、冬華から園崎茜やらなにやら聞いても「アイツは園崎輝だぞ？」で話は終わると思うが、井原の頭に少なからずその事が頭に残るだろう。

そして、井原が万が一「そう言えば王子、妹いるってマジか？ 園

「崎茜ちゃんとかなんとか」でも聞いたりしたら……あのポンコツ王子は十中八九ボロを出すだろうし、わざとでないにしても情報を洩らしてしまった俺に不信感を持つだろう。

となると俺が取るべき行動は被害を最小限に押さえる事である。

それに、冬華が王子の事を知ってるなら……なにか、聞ける事があるかもしれない。

……仕方ない。

「……わかった、わかったから、スマホ仕舞え……一から話してやる。その代わり他言無用だぞ」

俺の出したボロで漏れてしまった事を冬華まで留めるべく、俺はここ二週間の事を振り返りながら口を開くのだった。

「なにその乙女ゲー」

「乙女ゲー」

全てを洗いざらいぶちまけた結果、冬華が開口一番にそんな気の抜ける感想を漏らしたので、思わず復唱してしまう。

「えっ、聞いたいてなんだけど本当なの？ その乙ゲー状態」

「俺がこんなアホな嘘吐くか。残念ながらマジだよマジ」

「マジかー……なんなの、私は面白おかしくはやし立てたかっただけなのに、兄貴はなんでそんなわけわからない事に巻き込まれてるの？」

「俺が知るかよ……」

改めて口にするると本当に冗談みたいな状況であるが、残念ながら冗談でもなんでもない。

冬華はまだ信じきれていないようだが、俺の言葉に嘘はないので信

じてもらおうしかない。

「……まあ、確かにそれが本当なら納得出来る事はあるけど……」

「納得出来る事？　なにがあるのか？」

「ええ……兄貴、うちの学園のシステムって覚えてる？」

「お前の学園のシステム？　確か、運動やら勉強やら美術やらの成績が凄いと待遇良くなるとかさそんなだよな」

「そうそう」

冬華が通っている学園、『聖プラタナス学園』は結構特殊な学園である。

確か、未来を担う逸材を育成するとかそんな理念を掲げており、優秀な生徒に対しては学園はかなり援助をしてくれたりする。

かく言う冬華も、勉学の成績が非常に優秀であるとして聖プラタナス学園では特待生と呼ばれている立場であり、授業料免除と言った大変懐に優しい待遇を受けている。兄としては優秀な妹に育ってよかったと思う所だ。

閑話休題。

心の中で聖プラタナス学園のシステムを再確認していると、冬華が改めて口を開く。

「園崎先輩、学園にほとんど来ないのよ。園崎先輩は特待生の中でも特殊な扱いだから出席とかは免除されて……けど、全部が全部免除されるわけじゃないから、免除されない授業を必要最低限だけ出席してるらしいわ」

その冬華の言葉と共に、さつき王子が言っていた「それなりに大きなお嬢様学園で特待生やつてるから、出席とか色々免除されてるんだ」という言葉が頭を過ぎる。

「兄貴の話が本当なら学園にほとんど来ないのは納得できるわね……」

「でも、特待生ってだけで出席免除なんてあるのか？　冬華も特待生だが、出席免除なんてないだろ」

「園崎先輩は特待生の中でも特殊なの。園崎先輩は……まあ、天才よ」「あのポンコツが!？」

冬華が真剣な表情でそんな事を言うが、普段の天才とはかけ離れた王子の姿が浮かび思わず叫んでしまう。

「いや待てよ冬華、アイツかなりのポンコツだぞ？ 確かに成績は悪くないが……井原とどっこいどっこいな所あるぞ？ マジで」

「私としてはそれが一番信じられないわよ。だって園崎先輩、うちの学園ではかなりミステリアスな存在なんだから」

「ミステリアスウ!？」

アレでミステリアスなら井原とかハードボイルドと言っても通じるぞ!？」

あまりの驚きに次の言葉を吐けないでいると、そのまま冬華が言葉を続ける。

「ほとんど学園には来ないし、あの美少年顔だから人受けはいいのに誰とも関わろうとしないし……ついてる呼び名が深窓の王子よ」

「……王子なのは変わらないのか」

男装してるならわかるけど、普通に女の制服着てるなら姫とかそんな風と呼ばれてそんな物だけど、見てくれは悪くないんだし。

……いやまあアイツの顔なんざどうでもいい。

それより、誰とも関わろうとしないって言葉に引っ掛かりを覚える。

俺が知ってる王子は……どちらかという構って欲しい気質に感じるし、自分からグイグイ来そうな奴だ。

……謎が深まってきた。

「と、話が脱線したわね。」

園崎先輩は間違いなく天才よ……勉強や運動もできるけど、園崎先輩が凄いのは……ファッションデザイナーとしての才能よ」

「……………はあ？」

「なによ、その心底信じられないみたいな顔。本当の事よ？」

「いや、それこそないだろ……だってアイツのファッションセンス、最悪だぞ?？」

「そんなこと言われても、本当の事だもの。さっきの兄貴の言葉を真似るけど、そんな嘘吐くわけないでしょ」

確かにここで冬華に嘘を吐く理由なんてない。

……どういう事だ？ まさか王子の兄貴が聖プラタナス学園に通つてるとか……はないか、なんせ王子本人が通つてる事は間違いないだろうし。

「一体、なんなんだ……？ 謎が多すぎるぞ」

「……それにしても兄貴、随分園崎先輩の事を気にしてるね」

「あ？ そりや気になるだろ。なんか色々不可思議な感じなんだから」

「女嫌いなのに？」

「……いや、まあ、なんだ。女は嫌いだが王子はなんつか、マシな部類だし」

「へえー……へえー！」

「違うからな、マシなだけで女自体は嫌いだからな。つかニヤニヤすんな」

「そういう事にしておいてあげよう」

ニヤニヤしてる冬華のほつぺたを引っ張つてやりたい衝動に駆られるが、それを抑え込む。

「なんにせよ事情は把握よ。まさか園崎先輩が男装して兄貴とクラスメイトやつてるなんて……リアルも案外サブカルね」

「この話、誰にも漏らすなよ？」

「漏らさないし、そもそもこんなリアリティのない事を話しても誰も信じてくれないわよ」

「まあ、だろうな」

「……それにしても、なんで園崎先輩はわざわざ男装して、お兄さんの代わりに学園に通ってるの？」

「俺もそれが気になるんだよな……本人に聞いても関係ないではぐらかされるし」

「うーん……お兄さんに直接聞いてみるとか？ お兄さんなら事情は知ってそうだけど」

確かに、王子の兄貴なら事情は知っているだろう。

でも俺は王子の兄貴とコンタクト取る方法は持ってない。一応、王

子の家に直接電話をかければ兄貴の方と話せる可能性はあるが……
そもそも王子家の電話番号を知らない。

本人に聞くにしてもいきなり家の番号聞くのは不審に思われそう
だし……あつ。

「なあ冬華、王子の家の電話番号ってわかるか？」

「調べようと思ったら調べられるけど……必要なの？」

「ああ、やっぱ兄貴の方に話を聞いておきたい」

「ん、了解。明日まで待って」

「助かる」

王子は関係ないと突っぱねて来たが、やはり気になる物は気になる。
というかフォロー頼んでるクセに肝心な所隠されたら意味ない
だろ。こうなったら俺は俺で探つてやる。

もしバレて詰め寄られたら顔でもなんでも見せて開き直つてやる。
そんな決意を新たに、俺は少し冷めた飯を掻き込むのだった。